



北海道大学医学部創立 100 周年記念号

CONTENTS

◆ 研究院長より

- ・北海道大学医学部創立 100 周年記念式典 式辞 1

◆ 学術・教育

- ・北海道大学医学部百年記念館落成式 開催報告 2
- ・「北海道大学医学部百年記念館 落成式」に寄せて 4
- ・北海道大学医学部創立 100 周年記念式典・講演会・祝賀会 開催報告 5
- ・記念式典 祝辞 8
- ・記念講演会 第一部 11
- ・記念講演会 第二部 15
- ・記念祝賀会 特別講演『大志 BBA に培われて開基 100 周年』 19
- ・第 14 回医学研究院連携研究センター研究成果発表会を開催 26
- ・令和元年度医学教育等関係業務功労者表彰について 26
- ・第 23 回（2019 年度）医局対抗サッカー大会開催報告 27



北海道大学 医学部
創立100周年

1 研究院長より

北海道大学医学部創立 100 周年記念式典 式辞

吉 岡 充 弘（よしおか みつひろ）北海道大学医学部長

本日、文部科学省、北海道ならびに札幌市からご来賓をお迎えし、また笠原総長職務代理をはじめ副学長・理事、部局長の諸先生、名誉教授、そして同窓生の皆様のご臨席を賜り、ここに北海道大学医学部創立 100 周年記念式典を挙行できますことは、私どもにとりまして誠に光栄であり、また心からの喜びとするところであります。ここに医学研究院・医学部教職員一同を代表してご臨席の皆様にご心より厚く御礼を申し上げます。

北海道大学医学部は北海道帝国大学が創設された翌年の大正 8 年に設置され、今日まで 100 年の星霜を経て発展してまいりました。北海道大学医学部は、北海道大学の教育理念である「フロンティア精神」、「全人教育」、「国際性の涵養」、「実学の重視」を医学領域において具現化すべく学士教育に力を注ぎ、次世代を担う医学研究・教育者および先端医療の中心を担う指導医を育ててまいりました。これまでに 9,993 名の卒業生が巣立ち、国内はもとより、世界各国で活躍しております。

また、大学院医学研究科は昭和 30 年に設置され、平成 12 年の重点化により大学院講座制へ移行しました。さらに、平成 29 年には時代のニーズに即応できる人材育成に資する医学院・医学研究院へ改組され、各医学領域で世界を



リードする優れた研究を行うなかで、医学部の教育理念を更に発展させた大学院教育を行ってまいりました。これまでに 7,649 名が学位を取得し、ある者は医学研究・教育分野で世界に羽ばたき、ある者は世界最高レベルにある本邦の医療を支えて臨床分野で活躍しております。

また、平成 15 年には 4 年制の北海道大学医学部保健学科が設置され、看護学専攻・放射線技術科学専攻・検査技術科学専攻・理学療法学専攻・作業療法学専攻において、医療の現場で欠くことのできない高度専門職医療人

を養成しております。

医学部・医学院における教育は、優れた医学研究および診療と表裏一体の関係にあります。我々教職員一同は、多くの先人によって築かれてきた基幹総合大学の医学部としての伝統と責務を深く理解し、歴代の医学部長の指揮の下で一丸となって教育・研究・診療に日夜励んで参りました。現在、医学研究院では先端的研究手法を駆使して、生体構造・機能の発達や老化機序の解明、環境が生体に与える影響の解明、現代における社会医学的諸問題の解決、遺伝子工学、医学物理学、材料科学などを応用した病因解明および先端診断・治療法の開発など、世界をリードする多くのユニークな医学研究が行われています。

これまで、これらの研究を基盤として厳しい競争の中で採択された「未来創薬・医療イノベーション拠点形成」、「橋渡し研究戦略的推進プログラム」、「戦略的創造研究推進事業」などの国家的大型研究プロジェクトが着実に成果を上げております。また、「最先端研究開発支援プログラム」が本医学研究院から選定されたことは、我々の大きな誇りとするところであります。加えて本医学研究院の教員は本学の「実学重視」の精神を胸に高い臨床力を誇り、北海道大学病院が北海道における「最後の砦病院」としてその役割を果たし続けるために日夜の区別なく診療に従事する中で、いくつもの世界をリードする臨床研究を行っております。我々は今後も不断の努力を傾注し、本邦のみに留まらず、世界の医学・医療の進歩発展に寄与していくことを決意いたしております。

もとより北海道大学医学部の100年は、平坦な道ばかりではありませんでした。これまでの歴史の各節目においては多くの先人・諸先輩が言葉に表しがたい労苦を重ねられ、その上に現在の本学部が存在していることを、我々は常に理解しなければなりません。また本学部が

種々の困難に直面したときには、有形・無形のご支援・ご厚意を大学当局および多くの同窓生からいただいております。我々はそれらに対する感謝を忘れてはなりません。特にこの度の創立100周年記念事業に当たりましては、同窓会員の皆様、更には篤志家、団体、企業の皆様からのご寄附によりまして、医学部の悲願でもあり、医学部同窓会の結束を示す証でもある百年記念館を建立していただけることになり、北海道大学医学部・医学研究院教職員および学生を代表し、この場を借りまして厚く御礼を申し上げたいと存じます。百年記念館は、これまでにご寄附をいただいた多くの施設や設備と同様に、次世代を担う若い学生・研究者がその手で新しい歴史を作っていく基盤となるように、心して大切に使用させていただきたいと思っております。また、百年記念館は北海道大学医学部のみならず北海道大学の新しい顔として、また、レガシーとして存在し続けることでしょう。

本日、北海道大学医学部は100周年という大きな節目を越えて、さらなる100年へ向かって歩み始めます。歴史の節目を祝うことの意味は、過去を冷静に振り返り、先人の業績の上に立っている現在の我が姿を直視し、そして明日の生き方を考えることにあります。

我々はこれからも北海道大学医学部・医学研究院がさらに発展できるように、また世界の医学・医療の進歩、ひいては人類の幸福のために今まで以上に大きな貢献が出来るように、教育・研究・診療が三位一体となった我々の重い使命に全力で取り組む所存でございます。

結びに、本日ここにご臨席賜りました皆様をはじめ、多くの方々に、今後とも、北海道大学医学部に対しまして、何卒、より一層のご指導とご支援をいただけますようお願い申し上げます。私の創立100周年記念式典の式辞といたします。本日はご臨席を賜り誠に有難うございました。

2 学術・教育

北海道大学医学部百年記念館落成式 開催報告

去る2019年10月8日（火）、北海道大学医学部百年記念館の竣工を記念して落成式を挙行了しました。当日は約90名の教職員、同窓生及び学生等が参列しました。

はじめに、吉岡 充弘 医学部長による式辞の後、笠原正典 総長職務代理、秋田 弘俊 北海道大学病院長、浅香正博 医学部同窓会長による祝辞が述べられました。続いて、施工業者等への感謝状贈呈、建築デザインを手がけられた工学研究院 小澤 丈夫 教授による建築説明に引

き続き、関係者によるテープカットが行われました。

記念館は北海道大学大学院工学院学生のデザインを元に道産の木材をふんだんに使用し、メインストリートに面するガラス窓から北大の四季を感じられる建物となりました。館内には講演会、学会、会議、同窓会行事など多目的に使用できる設備を設け、次の100年に向けてさらなる医学の進展のため、知の共創の場として活用されることが期待されます。

落成式 次第

日時：2019年10月8日（火）午後1時30分～
会場：北海道大学医学部百年記念館 大会議室

開式

挨拶

北海道大学医学部長 吉岡 充 弘

祝辞

北海道大学総長職務代理 笠原 正 典

北海道大学病院長 秋田 弘 俊

北海道大学医学部同窓会長 浅香 正 博

感謝状贈呈

建築説明

北海道大学大学院工学研究院教授 小澤 丈 夫

北海道大学大学院工学研究院准教授 小篠 隆 生

テープカット

北海道大学総長職務代理 笠原 正 典

北海道大学医学部長 吉岡 充 弘

北海道大学病院長 秋田 弘 俊

北海道大学医学部同窓会長 浅香 正 博

北海道大学医学部創立100周年記念事業後援会

副会長 齋藤 和 雄

副会長 吉木 敬

閉式



落成式会場：北海道大学医学部百年記念館



テープカットの様子 左から：齋藤、秋田、笠原、吉岡、浅香、吉木



感謝状の贈呈を行う吉岡医学部長と小澤工学研究院教授



建物中央の階段途中に歴代医学部長・病院長の顔写真を望む



寄附者銘板に刻まれた名前を眺める参列者



医系建物模型を前に思い出を語る参列者

「北海道大学医学部百年記念館 落成式」に寄せて

小澤 丈夫 (おざわ たけお) 工学研究院建築デザイン学研究室 教授

小篠 隆生 (おざさ たかお) 工学研究院都市地域デザイン学研究室 准教授



小澤丈夫教授



小篠隆生准教授

北海道大学医学部が創立100周年を記念して建設した本百年記念館は、同窓会館として多くの同窓生が集い、気軽に情報交換が行われる場として構想されました。本学の医学進展の歴史や研究成果などの情報を共有し、今後の医学に貢献する基礎研究の推進と、知の共創の場となることを目的としています。本計画は、2015年より医学部百年記念館小委員会の主導で進められ、長年美しく継承されてきた本学札幌キャンパスへの配慮から、サスティナブルキャンパスマネジメント本部の助言を受け、工学研究院建築都市空間デザイン部門建築デザイン学研究室・都市地域デザイン学研究室の教員と大学院生が、デザイン検討を行いました。

現代に残る様々な史料を読み解くと、医学部と同附属病院、医学部の5年後に設置される工学部の建物群によって、13条門を入り口とする新たな東西軸が札幌キャンパスにつくられたことがわかります。今では銀杏並木として広く知られるこの東西軸の南側に医学部の校舎群、北側に医学部附属病院の施設群が建てられました。これらの建物は現存しませんが、残された写真に、明治期に輸入されたいわゆる木造洋風建築が、わが国に継承された優れた大工技術によって建てられた様子をうかがうことができます。前庭をもち整然と配置されたその姿には、凛とした気高さを感じることができます。また、これらの建物には、世紀末にウィーンで起こり、1920年代にわが国で芸術性を標榜する若き建築家達によって起こされた分離派(セセッション)の影響を受けたと思われるものも見られます。それは、様々な个性的なかたちの屋根や建物の正面などに現れています。このように、医学部創設期の建物群は、新しい時代の医学研究・教育に対する期待に応えるために、わが国に継承された建築技術を動員してつくられた、気高さと新奇性に富んだデザインの木造建築であったといえるでしょう。

史料から読み取れる医学部創設期建物群の特徴と、医学部百年記念館小委員会との協議を踏まえ、まず私たちは、本百年記念館のデザインコンセプトを、「同窓生を迎え入れるひとつの屋根」とし、同窓生が集い交流する場が、大きな屋根の下でひとつにまとまる建築をイメージしました。伝統を重んじつつ、たえず時代の先端を歩み続ける医学部の姿勢を表現するために、医学部の原点を改めて想起させ、わが国において長い伝統をもちながら、近年、国内外の建築分野で新たな可能性と挑戦が注目されている木造建築としました。

この建物では、北海道産木材を使用した現代の新しい

架構表現として、生産・加工面から汎用性をもつ12cm幅のカラマツ集成材を主材とし、4本の材を束ねた組柱に、伝統的な寺社建築に用いられてきた“斗拱(ときょう)”からインスピレーションを得た組物を柱頭に置きその上部に水平に広がる大屋根をのせています。水平屋根を支える梁も、12cm幅のカラマツ集成材を平行に組み合わせることによって、各部位にかかる異なる力に応じた必要断面積を確保しています。今回、数多い“斗拱”の先例の中で、特に鎌倉時代の僧侶重源(ちょうげん)が考案した、東大寺南大門にも用いられた大仏様(だいぶつよう)という様式に着目しました。これは、震災により伽藍の大部分が焼失した東大寺を、早期にローコストで再建するための合理的な建築技法として知られています。伝統的な架構の形態を応用しながら、木材の加工と現場施工の容易さ・合理性を適用するという大仏様の考え方を、現代において再解釈しました。具体的には、安価に入手出来る木材をできる限り工場で組み合わせ、施工現場での工程を最短にしました。特に、上述した12cm幅のカラマツ集成材を主材としている点はポイントになっています。部材の基本幅を決めることによって、必要断面の大きさを整理できるだけでなく、近年、グローバルな環境配慮から求められる“地産地消”という考え方に、流通面からも対応しようと考えました。道産材であるカラマツを使用しても、主たる架構を大断面の集成材にしてしまえば、現状では道内で加工することが難しくなります。ところが、材の最大幅を12cmとすることで、木材の生産と加工を、一般材としてすべて道内で行うことが可能になるからです。

組物をのせた組柱は、2階の天井下まで梁を介さず吹き抜け空間に立ち上がることによって、樹木のような形態になります。キャンパスを南北に貫く中央通りを美しく彩る並木と、それに平行に立ち上がる組柱の列が共鳴し、この建物が出会いと活動の場として印象的な空間になることを意図しました。会議、研修、展示、イベント等に使用する場合は、吹き抜けに開放された大らかな空間にしたいと考えました。1階大会議室は、引き戸によって囲うことも、吹き抜け空間であるエントランスホールと一体化した状態で使用することも可能とし、小さなパントリーを設け様々な企画に対応できるようにしました。2階多目的ホールとホールは、様々なイベントを行える間仕切りのない空間とし、道内の家具デザイナーによる木製の椅子とテーブルを置き、来訪者が寛げる大きなリビングルームとなるよう意図しました。エントランス南側に伸びた大きな庇は、訪れる人を迎え入れる役割を担います。外壁はカラマツ羽目板張りとし、中央通り沿いに木の表情を与えるようにしました。また、北国の気候に対し、快適な室内環境を担保する開口部の性能や設備システムを備え、意匠・構造・設備が一体化した建築デザインとしています。

最後になりましたが、本百年記念館が、これからの100年に向けた医学発展のプラットフォームになるとともに、将来にわたって本学札幌キャンパスの魅力を高める新たなランドマークとなり、医学部同窓生、教職員、学生はもとより、多くの皆様に親しまれる場となることを心より願っております。

北海道大学医学部創立100周年記念式典・講演会・祝賀会 開催報告

1919年に北海道帝国大学医学部として誕生した北海道大学医学部は、2019年に創立100周年を迎え、これを記念する行事が同年10月12日（土）午後2時から、京王プラザホテル札幌にて、「北海道大学医学部創立100周年記念式典・講演会・祝賀会」として開催されました。会場には、丸山 浩 文部科学省高等教育局医学教育課長をはじめ、北海道知事、札幌市長、北海道大学医学部教職員や同窓生など、約300名を迎え、盛大に執り行われました。

午後2時、地下1階会場のプラザホールにて、北海道大学交響楽団によるファンファーレが鳴り響くと、岩崎 倫政 北海道大学大学院医学研究院副研究院長による開式の辞により、「北海道大学医学部創立100周年記念式典」が開式となりました。

冒頭の吉岡 充弘 北海道大学医学部長による式辞の中では、ご参列の皆様への感謝の意とあわせて、大正時代から続く医学部の歴史を受け継ぎ、次の100年へのさらなる発展に向けた決意が述べられました。

次に、笠原 正典 北海道大学総長職務代理及び浅香 正博 北海道大学医学部同窓会長からの挨拶に続き、吉田 晃敏 旭川医科大学学長をはじめとする祝電が披露されました。

続いて、ご来賓を代表して丸山 浩 文部科学省高等教育局医学教育課長、鈴木 直道 北海道知事、秋元 克広 札幌市長、長瀬 清 北海道医師会会長より祝辞が述べられた後、前述の4名に塚本 泰司 札幌医科大学学長及び松家 治道 札幌市医師会会長を加えたご来賓の紹介がありました。

最後に、畠山 鎮次 北海道大学大学院医学研究院副研究院長による閉式の辞により閉式となりました。

続いて、午後3時より、同会場にて二部構成の「北海道大学医学部創立100周年記念講演会」が開催されました。



笠原正典 総長職務代理



記念式典会場の様子

第一部の座長は篠原 信雄 北海道大学大学院医学研究院教授が務め、武井 弥生 先生（産婦人科医 北海道大学医学部第58期 元上智大学総合人間科学部看護学科准教授）を演者に迎え、「次世代へのバトン ～アフリカ・アジア開発途上国での医療支援を経験して・・・～」と題しご講演いただきました。ご講演の中では、英国 リバプールで熱帯医学を学ばれた後、エチオピア、東ティモール、タンザニアでの、武井先生ご自身が経験された医療支援の実情を現場で経験した人でなければ語ることができない、臨場感のあるお話をいただきました。加えて、タンザニアでの日本語教育経験を通して教育の重要性を意識され、帰国後、国際看護教育にも尽力した経緯に触れられ、次世代へバトンを渡すことの重要性についても説かれました。

続く第二部の座長は畠山 鎮次 北海道大学大学院医学研究院教授が務め、川口 淳一郎 先生（国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所宇宙飛翔工学研究系特任教授）を演者に迎え、「やれる理由こそが着想を生む。～はやぶさ式思考法～」と題しご講演いただきました。ご講演の中では、地球重力圏外にある天体のサンプルリターンに世界で初めて成功した宇宙科学研究所（ISAS）の小惑星探査機「はやぶさ」の開発経緯に触れながら、“全ては心からはじまり、体はそれについてくる”、“環境が軽いプレッシャーと自信を育むことが重要であり、伝統は環境で作られる”、“新たなページを開かないと、より広い世界は見えてこない”などのご自身の経験から導かれた格言をご紹介いただき、やれる理由を見つけて挑戦しない限り、成果は得られないことを説かれました。

いずれのご講演内容も、次の100年に向けて後進の人材をどのように育成していくべきか、その道標の手掛かりとなる示唆に富む内容でした。それぞれ約45分間のご講演には、記念式典参列者や北海道大学医学部教員だけではなく、北海道大学関係部局の学生も多数参加し、講演後、会場は盛大な拍手に包まれました。

講演会の終わりに参加者全員で記念撮影を行った後、会場を2階のエミネンスホールに移し、午後5時30分より、「北海道大学医学部創立100周年記念祝賀会」が開催されました。

はじめに、北海道大学交響楽団による「楽劇ニュルンベルクのマイスタージンガーより第1幕への前奏曲」の演奏が行われ、開会にあたり、吉岡 充弘 北海道大学医学部長及び浅香 正博 北海道大学医学部同窓会長から挨拶があった後、塚本 泰司 札幌医科大学学長より祝辞が述べられました。

続いて、笠原 正典 北海道大学総長職務代理、鈴木 章 北海道大学名誉教授、浅香 正博 北海道大学医学部同窓会長、齋藤 和雄 北海道大学医学部創立100周年記念事業後援会副会長、長瀬 清 同副会長、吉木 敬 同副会長、秋田 弘俊 北海道大学病院長及び吉岡 充弘 北海道大学医学部長の8名が壇上に上がり、篠原 信雄 北海道大学医学部創立100周年記念式典委員会委員長の音頭により鏡開きが行われました。鈴木 章 北海道大学名誉教授による乾杯のご発声の後、会場には鏡開きに使用した緑川酒造株式会社の「清酒 緑川」とあわせて、創立100周年記念ロゴマークが刻印された枡が配られました。

その後、田中 伸哉 北海道大学医学部創立100周年記念誌刊行委員会委員長による「北海道大学医学部創立100周年記念事業報告」が行われ、その中で岡田 晃 先生、阿部 弘 先生及び谷口 直之 先生よりそれぞれの思い出とこれからの北大医学部に対して期待することをご披露いただきました。

最後に、田邊 達三 北海道大学名誉教授より、「大志BBAに培われて開基100周年」と題して、開学時代から現在にいたるまでの北海道大学医学部及び北海道大学病院の変遷について、歴代の教授陣や当時の授業風景等の豊富な懐かしい写真等をご紹介いただきました。BBAはBoys be ambitiousの略ですが、ご講演の中で“後進に大志の心を伝える”、“叡智を結集して100年後の学府の姿を練る”、“未来を展望する人材育成”などのたくさんの格言もご紹介いただき、それらの意図を説かれ、次の100年に向けて示唆に富むご講演をいただきました。

閉会にあたっては、秋田 弘俊 北海道大学病院長より締め乾杯のご発声をいただき、祝賀会参加者全員で北海道大学寮歌「都ぞ弥生」を斉唱し、約7時間に及ぶ北海道大学医学部創立100周年記念事業のプログラムは盛況のうちに幕を閉じました。

式典・講演会・祝賀会 次第

日時：2019年10月12日（土）午後2時～
会場：京王プラザホテル札幌

———記念式典———

開式の辞

式辞

北海道大学医学部長 吉岡 充弘

挨拶

北海道大学総長職務代理 笠原 正典

北海道大学医学部同窓会長 浅香 正博

祝電披露

祝辞

文部科学省高等教育局医学教育課長 丸山 浩

北海道知事 鈴木 直道

札幌市長 秋元 克広

北海道医師会長 長瀬 清

閉式の辞

———記念講演会———

演題 『次世代へのバトン ～アフリカ・アジア開発途上国での医療支援を経験して・・・～』

産婦人科医 北海道大学医学部第58期

元上智大学 総合人間科学部看護学科 准教授

現余市協会病院 地域医療国際支援センター

武井 弥生

演題 『やれる理由こそが着想を生む。

～はやぶさ式思考法』

国立研究開発法人 宇宙航空研究開発機構(JAXA)

宇宙科学研究所 宇宙飛行工学研究系 特任教授

川口 淳一郎

———記念祝賀会———

開会のことば

奏楽

挨拶

北海道大学医学部長 吉岡 充弘

北海道大学医学部同窓会長 浅香 正博

祝辞

札幌医科大学学長 塚本 泰司

鏡開き

祝杯

医学部の紹介「医学部創立100周年記念事業」

北海道大学医学部創立100周年事業実行委員

田中 伸哉

講演「大志BBAに培われて開基100周年」

北海道大学名誉教授 田邊 達三

乾杯

北海道大学病院長 秋田 弘俊

都ぞ弥生

閉会のことば



浅香正博 医学部同窓会長



祝賀会会場の様子



秋田弘俊 病院長



医学部創立100周年記念誌刊行委員会委員長 田中伸哉教授



参列者による記念撮影

丸 山 浩 （まるやま ひろし）文部科学省高等教育局医学教育課長



北海道大学医学部創立100周年に当たり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

北海道大学医学部は、大正八年に北海道帝国大学医学部として設置され、開設以来、大学の基本理念である「フロンティアスピリット」を受け継ぎながら、先端研究

成果を常に追求するなど、我が国と世界の学術及び医療の発展に多大な貢献をしてこられました。

本日ここに、医学部創立100周年記念式典が盛大に举行されますことを心からお慶び申し上げますとともに、今日まで、貴学部の充実・発展にご尽力された、吉岡（よしおか）医学部長を始めとする歴代の医学部長や関係の皆様方のたゆみない御努力に対し、深く敬意を表します。

北海道大学医学部は、「世界をリードする先進的医学研究を推進し、高い倫理観と豊かな人間性を有する医学研究者・医療人を育てることにより、人類の健康と福祉に貢献する」という理念の下、これまでに一人一人近い人材を輩出し、卒業生は日本全国はもとより世界各地で活躍しております。

近年、我が国においては、少子高齢化の急速な進展、疾病構造の変化、グローバル化の進展など、医療をめぐる社会環境の急激な変化に伴い、医学教育・研究と医療を担う大学の役割に対して社会の期待がますます高まっています。

鈴木 直 道 （すずき なおみち）北海道知事



本日、「北海道大学医学部創立100周年記念式典」が多くの皆様の御参加のもと、盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。

北海道大学医学部は、1919年に北海道帝国大学医学部として設置されて以来、一人一人近くの卒業

生を輩出しており、御卒業された方々は臨床、研究、教育をはじめ様々な分野で、国内はもとより世界各地で活躍されています。

北海道との関わりでは、北海道医療対策協議会において、地域の医師確保に関する御提言をいただき、道内各

このような中、北海道大学医学部においては、大学病院で取り扱う特殊な疾患の診療参加型臨床実習のみならず、更に一般的な疾患を学ぶため、平成二十九年度から、全道の約五十の病院の協力を得て、学生に実際の臨床現場の最前線で学ばせるなど、臨床教育の強化を図っておられます。また、これまで多くの外国人留学生を受け入れ、国際感覚を身につけられるような環境整備に取り組まれておられるほか、学生の海外派遣事業を積極的に実施するなど、グローバル人材の育成を進められています。

さらに、研究面では、がんを中心とする病理学研究、結核等の感染症研究を通じた遺伝子病研究に取り組まれており、診療面においても、動体追跡陽子線照射装置の開発による陽子線治療や骨髄由来幹細胞を用いた再生医療など、国内をリードする最先端医療を推進されております。

北海道大学医学部がこれまでの取組を今後さらに推進し、教育・研究・医療活動の一層の充実発展を遂げられますことを心から期待しております。

文部科学省といたしましても、国民からのニーズに対応できる優れた医療人材が養成されるよう、引き続き教育・研究の充実のための施策を推進してまいります。

結びに、本日御臨席の皆様方におかれましては、医学教育・研究及び医療の進展のため引き続き御支援・御協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、北海道大学医学部のますますの御隆盛を心より祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

地の医療機関に多くの優れた医師を派遣いただいています。

本道において、誰もが安心して暮らすことのできる活力ある地域社会づくりに向けて医療の確保がますます重要になっている中、吉岡医学部長をはじめ、関係者の皆様には、地域医療の提供体制の確保・充実に、多大なる御貢献をいただいております、心から感謝申し上げます。

さらに、先進的な医学研究の分野では、北大病院において、がんの陽子線治療や再生医療に目覚ましい成果を重ねられ、本道、世界の医療をリードされていることに心から敬意を表します。

道民の皆様にとって、北大医学部で学んだ優れた人材が、北海道に愛着を持ち続けながら、国内外で活躍され

ていることは誇らしいことです。

また、健康・長寿への関心が高まる中で、道民の皆様の医療に対する期待は大変大きいものがあり、道としては、北大医学部をはじめ関係機関と連携のもと、良質な地域医療の提供体制の確保に向けて、医師派遣はもとより、医師の勤務環境の改善、本道の医療を担う人材の育成・支援など様々な取組を進めてまいります。

秋 元 克 広 （あきもと かつひろ）札幌市長



札幌市長の秋元克広でございます。本日はお招きいただきまして、誠にありがとうございます。このたび北海道大学医学部が創立100周年という記念すべき年を迎えられ、その記念式典がこうして大勢の皆様がお集まりの中で盛大に開催されますことを、心からお

祝い申し上げます。

北海道大学医学部は、大正8年（1919年）に前身である北海道帝国大学医学部として、この札幌の地に設置されて以来、9600名を超える卒業生が巣立ち、医学・医療の分野で活躍する多くの優れた人材を輩出してこられました。今日までの100年という長きにわたって続けてこられたのは、歴代の関係者をはじめ、本日お集まりいただいている皆様の多大なるご尽力の賜物であり、深く敬意を表するところでございます。

さて、皆様ご承知のとおり、我が国では現在、人口減少や少子高齢化の進展といった時代の大きな転換期に直面しております。ここ札幌におきましても、市民の医療や福祉に対するニーズが多様化・高度化するなど、地域を取り巻く環境が大きく変化しているところです。

このような時勢におきましても、安心して暮らせるまちの実現はもちろんのこと、魅力あふれる北海道・札幌を未来につないでいかなければなりません。本市では、年齢を重ねても元気に生活することができる、いわゆる「健康寿命」を伸ばす取り組みを実施するとともに、誰

皆様におかれましても、引き続き、御理解と御協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

結びに、北海道大学医学部がこの100年の輝かしい歴史を礎として、より一層の御発展を遂げられますとともに、本日お集まりの皆様のみずみずの御健勝と御活躍を心から祈念申し上げ、お祝いの言葉とします。

もが住み慣れた地域で安心して生活できるよう在宅医療提供体制の充実や、地域と結びついた医療連携体制の構築を図っております。また、昨年の北海道胆振東部地震を踏まえ、災害時における医療提供体制の強化につきましても進めているところであり、こうした取り組みを推進していくためには、行政の力だけではなく、皆様方のご理解とご協力がますます重要となってまいります。

北海道大学医学部の皆様におかれましては、「世界をリードする先進的医学研究を推進し、高い倫理観と豊かな人間性を有する医学研究者・医療人を育てることにより、人類の健康と福祉に貢献する。」という理念のもと、日頃よりご尽力をいただいております。今後も新たな100年に向けて、「優れた人材の育成」と「健康・福祉への貢献」に積極的に取り組み、街の活力向上に寄与していただくことをご期待申し上げます。

3年後の2022年には、札幌も市制を施行してから100年という節目を迎えますが、北海道大学医学部は、札幌の創成期から北海道・札幌の医学・医療を牽引してこられた心強い存在であります。本市といたしましても、皆様をはじめとする関係者の方々との連携を高めながら、誰もが健康で安心して暮らせるまちの実現に向けて、全力で取り組んでまいります。どうか皆様には引き続き、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びになりますが、北海道大学医学部がより一層ご発展されますことと、本日お集まりの皆様のご健勝、ご活躍を心から祈念申し上げまして、私からの挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。



只今、ご紹介頂きました北海道医師会長を務めております、北海道大学医学部四十期卒業の長瀬清です。

本日ここに、北海道大学医学部創立百周年記念式典が開催され、このように多くの関係者が集い、盛大にお祝い出来ますことを、心からお慶び申し上げます。

北海道大学は明治九年札幌農学校を前身として創設され、明治四十年に東北帝国大学農科大学を経て、大正七年、国内「七帝大」の五番目として北海道帝国大学が設立されました。医学部はその翌年、大正八年四月に設置され、その歴史が始まりました。爾来今日に至るまで、本道のみならずわが国の医学・医療に関わる教育・臨床・研究の発展向上のために尽くされ、昭和元年卒業の一期生以来、数多くの優秀な人材を世に送り出して来られました。

この百周年という節目の慶事を迎えることが出来たのも、吉岡充弘医学部長を初めとして先達の方々が、幾多の苦難を乗り越えて、医学部の発展のために、心血を注いで来られたからにほかなりません。

関係者の皆様方のこれまでの並々ならぬご苦勞とご尽力に対しまして、深く敬意を表する次第であります。

さて、科学の進歩はまさに目覚ましいものがありました。医学部創設後の約五十年の、私が医者となった昭和四十年頃、医療器機といえば聴診器、血圧計、X-線装置、胃カメラくらいしかなく、知識と勘、経験に頼っていた医療が、急速に進歩し、心電計、超音波装置、CTスキャン、MRI等、医療技術や医療器機の高度化をもたらし、また、医療分野の細分化、専門分化が進み極めて複雑化しております。それに加えて、今日の医療では科学的根拠が厳しく求められ、「根拠に基づく医療」、EBMの実践が重要となっております。

この様な状況を考えますと、医療人の教育・養成機関としての大学医学部の果たすべき役割はますます大きいと思います。

次の百年後がどのような形で終わるか想像も出来ませんが、我が北海道大学医学部が、医学・医療の先導者としての役割を果たされること、この創立百周年を契機として、さらに社会からの期待に応えるべく、より一層の飛躍と発展を遂げられますことをご期待申し上げます。

結びに、北海道大学医学部のますますのご発展と、ご参会各位のご健勝をご祈念申し上げ、簡単ではございますが、お祝いの言葉と致します。本日は誠にありがとうございます。



記念式典後 集合写真

後列左から：北大理事・事務局長 関靖直、北大医学部創立100周年記念式典等委員会委員長 篠原信雄、北大病院長 秋田弘俊、北大名誉教授 田邊達三、同左 小林博、北大医学部同窓会長 浅香正博、北大医学部創立100周年記念事業後援会副会長 齋藤和雄、同左 吉木敬、北海道医師会長 長瀬清、札幌市医師会長 松家治道

前列左から：記念講演会講演者 武井弥生、同左 川口淳一郎、北大総長職務代理 笠原正典、北大医学部長 吉岡充弘、文科省高等教育局医学教育課長 丸山浩、北海道知事 鈴木直道、札幌市長 秋元克広、札幌医科大学学長 塚本泰司（敬称略）

『次世代へのバトン ～アフリカ・アジア開発途上国での医療支援を経験して・・・～』

武井 弥生 (たけい やよい) 産婦人科医 (元上智大学総合人間科学部看護学科 准教授)

現余市協会病院 地域医療国際支援センター (北大医学部58期)



母校の創立100周年という貴重な機会に、私のような浅学の者が、医学の研究や地域の医療に深く日々さざげられている先輩のかたがたを前にお話させていただけるのは大変な、身に余る名誉であり、心から感謝すると同時に身が縮む思いです。

医学部長の吉岡教授、大学院医学研究院副院長の篠原教授らに目を止めていただいたとすれば、30代から背中を押されるように、危険や将来も考えず、向こう見ずに海外で働いてきて、一応今も元気であるからなのではないかと思います。これまでの経験を、時系列で4つにわけてお話しし、次でなくても、今の世代の方にも少し「バトン」にさわっていただければいいなと思います。

アフリカ以前

私は、旭川生まれの道産子です。物心がついた昭和30年代、冬に雪で交通が遮断され、陸の孤島となった村で虫垂炎の患者さんが治療を受けられずに亡くなったという記事を読み、将来は僻地の医師になろうと思いました。またその頃、小学校の図書館にあった偉人の伝記で、シュバイツァー博士というアルザス出身の神学者でオルガニストが、アフリカの医療の現状を知り30才から医学を志し、90才で亡くなるまで医療活動を行ったこと、アフリカという大陸があり、そこにはまだ医療を受けられない人が沢山いることを知りました。日本では何とかして病院にかかれる時代に、そうでない所が地球上にあるなら、そこに行こうと思いました。

憧れの北大の学生時代は、受験勉強の反動で体育会の剣道部に入り、稽古に明け暮れました。大学最終学年の春休みフラテ会で上京し病院を見学し、将来南の国に行くには北大か、東京国際医療センターかと考え、当時女子医大から戻られ事情をよくご存知の第三内科の宮崎保先生に相談にいきました。宮崎先生が「海外で働いている人、その人たちの帰国報告会・講演会など東京の方が北海道よりずっと多いでしょう、まずは内科的な考え方を身につけなさい」と言ってくださり、話を終え教授室のドアを閉めた時は、女子医大に行くことに決めました。

東京で出会った海外経験者たちから、日本で一番途上国に近い場所があるとすすめられたのが山谷という荒川

区台東区にまたがった地区でした。かつて日本の高度成長を担った、日雇い労働者の宿屋街です。地域のおじさんたちはその日の稼ぎがないと公園で寝泊まりし、町はお小水の香りが漂い、今でもそうですが結核罹患率が他の地区より高い地域でした。ほとんどの住民が健康保険証を持っていないため、寄付で賄われている無料クリニックがあり、そこには肝硬変や、冬の寒さをしのぐためお酒を飲んで焚火にあたり、寝込んでしまって背中に大やけどを負った患者さんらが来ていました。私はそこで掃除のボランティアをしました。そんなおじさんの中に、お金が入った時にお礼と共に缶コーヒーをくれた患者さんがいました。貧しい人の精いっぱいの感謝を嬉しく思いました。そしてそれは後に途上国でも出会う事になりました。

将来働く選択肢としてJICAの青年協力隊もありましたが、まずは熱帯医学を勉強しようと、留学資金がたまった時点で女子医大をやめ、生まれて初めての海外、英国に向かいました。

はじめスコットランドのエジンバラで英語を学びましたが、そこでエジプトで住血吸虫という膀胱の寄生虫の調査をしていた大学教授や、両親の仕事の関係でアフリカで生まれ育った金髪碧眼の医学生らと出会い、急にアフリカが身近になり、更に皆これからアフリカに向かう私を驚くほど励ましてくれました。リバプールの熱帯医学校に入学したのですが、強いなまりの英語を話す人々は教官も含め親切で、初めて聞く沢山の寄生虫と格闘し国試準備以上に勉強しました。無事卒業しエチオピアに渡航する一ヶ月前に移民局に一月のビザ延長に行ったら、戻ってきたパスポートには3ヶ月もの滞在許可が降りていました。東洋からアフリカへ行くために来た留学生を、英国の人々が親切に元気づけてくれたことに感謝しています。

エチオピア

初めてのアフリカはエチオピア連邦民主共和国でした。医師不足で困っていたエチオピア南部の村のミッション病院で働く知人の日本人看護師から、現地に来るようにと依頼の手紙がリバプールに届きました。当時、まだ独立前のエチオピアに統合されていたエリトリアを含む北部と、エチオピア軍との内戦の真っ最中でした。南部のその病院に安全かどうかを確かめる手紙を出したところ、一ヶ月かかって返ってきた院長からの返信に



写真1 エチオピアの結核病棟にて小児患者の診察

は、「内戦の舞台は北部であり、南部はとても平和」とありました。念願のアフリカに初めて行ける喜びで高揚していた私は安心してロンドンを旅立ちました。(写真1)

病院に着任した2ヶ月後の5月のある日突然、首都から50kmのところまで反政府勢力が侵攻したとニュースが入りました。国内に残っていた市民は看護師と私の二人だけで、日本大使館から、3日後に出る最後の民間機を予約してあるので来るようにと電話がありました。しかし翌朝、すでに、アジスアベバは包囲されたため、村にとどまるのみでした。エチオピア国軍の兵士が各地の兵営を逃げ出しエチオピア全土が無法状態となり、無人となった兵営に村人たちが侵入し兵器や弾薬を盗んで道端で売り、それらを手に商店や学校教会の略奪を始めたのです。そして、明日私たちの病院が狙われるという噂が広まり、同僚のエリトリア人女医と全ての金目の物を差し出す覚悟を決めました。でもたった一つずつ、彼女は水銀血圧計、私は中古のアコーデオンを屋根裏に隠しましたが。病院側は村の長老たちと会議を開き対応策を練った結果、村の男たちが交替で寝ずの番をして病院を守る事になりました。その夜、パンパンという威嚇射撃の音を聞きましたが、目覚めた時は朝日が窓から差し込み、無事だったと知りました。

その後危険なことはありませんでしたが、抗てんかん薬やインスリンの在庫が底をつき、薬をもらいに來たてんかんの患者さんが泣きながら空手で遠い道のりを帰ってゆくのを見つめるだけでした。

患者さんは殆どが感染症で、リバプールで学んだ、マラリア、腸チフス、結核、発疹チフス、腸管寄生虫、栄養失調、多剤耐性の淋菌などでした。外来で一番多かったのは活動性肺結核で、咳のひどさと肋骨の浮き出た胸の聴診から、その患者さんの喀痰のチールニールセン染色のガフキー号数が見当つくようになるほど多かったです。聴診している私の鼻先めがけて咳こむおじいさんに、「口を手で覆うように」というと素直に覆うのですが指は閉じずに開いたまま。そういう教育を受けてないのですから仕方ありません。最終的に私も結核性胸膜炎

になってしまいました。

ある時8才の女の子が破傷風で運ばれてきました。新生児の破傷風は自宅分娩で臍帯を不潔な包丁やかみそりなどで切断され、一週間後に全身症状が発症し病院に連れてこられます。入院後は光の当たらない暗箱の中に寝かせ、ワクチン、抗生剤ペニシリンの治療をしても全員助けられませんでした。その8才の子も顔は咬筋の収縮で薄笑い様、かつ全身の強直けいれんで運ばれてきたのですが、感染の傷口が足の指と末梢だったこと、年長だったことなどより、同じ治療でも助けることができました。

退院して数日後にこのスライドのおじいさんが孫娘を連れてお礼にやってきました。白いマントに隠し持っていたのは瓶詰の牛乳。牛乳は貴重品で、後で煮沸してから飲もうと手を伸ばしたら、今ここで飲みなさいというのです。困って、今お腹の調子がよくないから後で、と嘘をついたところ、嬉しそうに、これはタギッチョ、菓だから、それこそ今飲みなさいと。あまりに強いるので、逆らえずその場でえいっと飲みました。見届けたおじいさんは帰宅。私も下痢も何もありませんでした。同僚に言うとおじいさんは体の弱い外国人のために、飼っている中で一番健康な牛を選び、瓶を洗ってつめ、持ってきてくれたのではとのこと。限られた物で精一杯の感謝の気持ちに触れました。

半年ほどすると外来の診察はかたことのシダモ語を交えるようになりました。英語は万能でないことを知り、この後、東チモール、タンザニアでもなるべく現地の言葉を使うようにしました。また現地で初めて知ったことは、盗みが日常茶飯事となっていること。その後、東チモールでも難民キャンプでもそうでした。鍵のかけ忘れ等、全て自分に非がありました。周りは皆貧しく、外国人は持てる人なのです。

現地のお産は殆どが自宅分娩で、問題が起こった時だけ病院に來ます。逆子でお尻から出てきた赤ちゃんの、頭だけが子宮内に残っている状態、子宮内に胎児がまだいるのに臍帯が先に飛び出て拍動がなくなっている状態、横位で赤ちゃんの体が子宮の中で縦ではなく横になって出られず腕だけが飛び出し、紫色になっている状態などです。帝王切開ができれば助けられたと思います。マラリヤなどの風土病化している疾患は医師看護師でなくてもトレーニングを受けた現地のヘルスアシスタントでも治療できますが、手術は付け焼刃ではできません。帰国したら産婦人科医学を学ぼうと思うようになりました。

産婦人科

帰国し簾舞の国立療養所に入院しました。退院後宮崎先生から産婦人科の藤本教授を紹介していただき、変則的な入局を受け入れて頂きました。最初は帝王切開がで

きるようになったら海外へと思っていたのですが、帝王切開も一筋縄でないこと、異所性妊娠（子宮外妊娠）や卵巣腫瘍などにも対応できるようになりたいと思うようになりました。

1999年、それまで東チモールを不法に占拠していたインドネシアから、国民投票で独立を勝ち取り東チモール民主共和国となったのですが、その国民投票直後、撤退するインドネシア軍と親インドネシア派の民兵による残虐な襲撃があり、深刻な被害が報道されました。現地視察に行った日本カトリック医師会の医師団から、短期間でもよいボランティア医師が募られました。当時帯広厚生病院に勤めており、ダメもとで行かせてもらえないか尋ねたところ、川口院長をはじめ、津村医局長、同僚の山田、越田、斎藤の各先生が快諾してくれ、一か月の休職を認め、私の担当していた妊婦も含めて外来を皆で分担してくれました。

入国した東チモールの村々は騒乱後5ヶ月たっても焼けた家屋が放置され、焦げた臭いが漂っており、手付かずの美しい海や山とのコントラストが印象的でした。東チモールの東部フィコロという町で放火を免れた学校の教室を利用しクリニックを開きました。5時間も6時間もかけてチモール島の東のはずれから徒歩で、マラリアなど高熱の患者さんがやってきては、薬を受け取り一回分をクリニックで飲み、そして解熱しないまま徒歩で帰るのです。現地は、とても産婦人科医をする状況ではありませんでした。ユニセフの担当者が首都ディリからクリニックを視察に来た際、私が産婦人科医と知ると、「山間部ではたくさんの妊婦さんが死んでいる、あなたは必要とされている」と言われ、産婦人科医としてまた戻ってくる決心をしました。その翌年、東チモールに行くために、お世話になった帯広厚生病院を辞めました。

医師不足の国連東チモール暫定政府が各国外務省に流した医師募集を外務省の友人が転送してくれ、それに応募して採用されました。エチオピアの内戦で心配した両親は初めて空港まで見送りにきてくれました。今は亡き二人に心から感謝します。

当時東チモール40万人の国民に産婦人科医が私ともう一人だけという時期もあり、殆ど毎日、運ばれてきた妊婦さんの帝王切開をしていました。現地の助産師は大変優秀で、夜間も骨盤位も含め殆どの分娩をこなし、当直で呼ばれたときの選択肢はほとんどが帝王切開という状態でした。現地のスタッフは、新しい技術や知識はないかもしれませんが、医師不足などの限られた環境で技術を磨いてきており、敬意を払いました。後程大学の国際看護の講義でも助産師の重要性を強調しました。

一年の東チモール勤務後、赤十字の知人から依頼されタンザニア連合共和国にあるコンゴ人の難民キャンプで保健要員として働くことになりました。

タンザニアは他のアフリカの国々と比べると政治的に安定しており、国境を接している8つの国のどれかに紛争があると難民を受け入れ、時にはタンザニアへの帰化も許していました。コンゴ人難民たちは、タンザニアの間に横たわる世界第二の深さのタンガニーカ湖を、命辛々商業ボートに20ドルもの大金を払って対岸に渡ってきます。そこには国連難民高等弁務官UNHCRのバスが待っており、100km穴ぼこの道をサバンナ原野まで辿り着くと、最低限の調理道具と世界食糧機構WFPの用意した一人一日当たり1800キロカロリーの油、塩、とうもろこしの粉などをあてがわれ、家づくりに取り掛かります。日干し煉瓦の家々は狭く密集しており、7年以上もキャンプ生活を続けている難民の一人がふるさとを懐かしんで、「コンゴでは広い敷地の家にすんでいたんだ」と言っていました。これと同じ言葉を7年後日本で聞くことになりました。東日本大震災で家が津波で襲われ避難所に住んでいた避難民が、元居た家は広かったんですと。日本で他の国の反乱分子同士が侵入し、お互いが戦って日本国民が住み慣れた家を放棄して逃げまどうということは無いでしょうが、自然災害によってコンゴ人難民と同じような状況があり得ることを知った瞬間でした。

ある週末、難民キャンプの友人宅にむかっていたら、突然コンニチワという日本語が聞こえました。それは、NHKのスワヒリ語の国際放送での日本語教室で勉強するグループの一人でした。グループは早朝その放送を聞くため小学校に集まり質の良くない電池式のポータブルラジオから流れる日本語に耳を澄ましていたのです。番組の教科書が欲しいというので、100キロ離れたキゴマという一番近い町に行く際に、インターネットカフェに行きNHKにメールで難民たちの勉強に使うので教科書を送ってほしい旨伝えました。すると二週間もしないうちに航空便で100冊の教科書が届いたのです。それを使い、日曜に日本語学校が開かれ、私は即席講師になりました。

なぜ日本語など勉強するか聞いたところ、将来コンゴに帰還できた時、日本企業に就職できるようであれば役立つと思って、と。先が見えず、教育の機会もないところで、小さなチャンスをとらえて希望に結び付ける努力を、日本の若者に伝えました。

教職期間

8年前、大学の教職を引き受けた理由は、これまでの海外の経験を国際看護の講義に生かせるかもしれない、産婦人科医として大学生が知るべき命の大切さを伝えられるかもしれない、との思いがありましたが、最大の理由は、行きたいときに行きたいところに行ける長い休暇が魅力的だったためです。そんな不純な理由で引き受けたため、講義の準備は大変苦勞しました。

ウガンダ共和国北部に流行していた「うなづき症候群」と出会ったのは、そこが世界でも有数のHIV感染国であり、そのHIV罹患率が1990年代、まだ抗ウイルス薬がない時、ABCという国家的キャンペーンだけで大きく改善し世界の脚光を浴びたのですが、その後の状況を調べていた時です。ウガンダ政府の目下の懸念事項は、今ではHIVよりうなづき症候群である、とあったのです。その直後、京都大学の、ウガンダをベースにしている文化人類学者の最初の「うなづき症候群」報告会を知り急遽参加しました。そのままネットワーク立ち上げの一員となり、その年の夏休み早速患者家族に会いに渡航しました。(写真2)写真で私の両腕は両脇の患者の家族からしっかりと握られています。左のかたは当時村長で、「我々の希望は、病気の原因を知ることと、治ること。でも支援が無理となったとしても、どうか我々を忘れず、尋ねてきてほしい」と挨拶しました。関心を持ち続けてくれという静かな叫びでした。

このアチョリ民族は過去20年もの間、反政府ゲリラと政府軍との紛争の最中、戦火を避けさせるため狭い集中キャンプに強制的に押し込められていました。数年前に抗争が終わりキャンプからやっと自分たちの村に戻り、荒れ果てた畑を耕し始めたころ、これから手伝いを始める元気だった子供たちが次々に奇病を発症したのです。

私たちは当初文化人類学者と医学者との学際的協力で、なんとかこの疾患の初歩的な糸口を掴めるのではと考えていました。しかし、ウガンダ政府の主導のもと2013年国立大学医学部、アメリカ政府及びWHOによって大規模な医学調査が行われ、数年前から国立大学らによって河川盲目症との関連が示唆されるようになってきました。河川盲目症とは川に生息するブヨを媒介し、刺された人の皮下で寄生虫が増殖し最終的に眼球に入り込んで失明する熱帯地方の病気です。そのような中で小グループの私たちは、病気そのものよりも、てんかん患者とその家族への社会調査をベースに、限られた資源を用い、どのように効果的なケアが望まれるか、実現可能かなどへ移行していくことになります。



写真2 ウガンダのグル県ラクウェア村にてうなづき症候群患者の親たちと

これまでの調査に基づき、すでにくつか支援を行っています。男手のない女性世帯のお母さんおばさんが大黒柱の患者家族を支えるため、皆でお互いの畑を順番に共同耕作するのに効率の良い耕作用の牛の支援、栄養改善のための乳牛の支援、またそれまで薬は徒歩で6キロ離れたヘルスセンターに抗てんかん薬を取りに行っていました。患者と付き添いの二人分の乗り合いバスの交通費を支給、茅葺きの家はちょっとした失火から全焼してしまうので、屋根を葺く鉄板などを支給しています。交通費のおかげで安定して薬が手に入るようになりてんかん発作頻度が減った患者もいます。

ただ私は医師として関わった以上、少しでも医療的アプローチができればと思っています。うなづき症候群の診断は、特徴的な初発症状、食事の際や冷氣によって突然首の筋肉が脱力する発作を、家人が見てヘルスセンターで申告して登録され、抗てんかん薬が開始されます。薬はバルプロ酸とカルバマゼピンの二種類のみです。薬が効かない難治性のてんかん患者はこの6年間で何人も亡くなりました。少しは助けになるかと思い、数年前から、大学の合間に仙台のベール病院でてんかんの勉強を始めました。やっと電極を間違えなく頭につけられるようになり、今年の8月に渡航した際、うなづき症候群の研究・診療の第一人者であるイドロ先生に、いつか私を使ってくださいとお願いしたところ、電極より産婦人科医としてはたらいしてほしいなあ、と言われてしまいました。

アジア・アフリカの人たちから学んだことを講義で伝える他に、教官として、気を付けたことが二つありました。

一つは教室の中よりも教室の外へ。もう一つは教師としての自分の言行一致です。

上智大学の名誉教授で元国連難民高等弁務官の緒方貞子さんは徹底した現地主義で、私も見習いなるべく見学をシラバスに取り入れました。お話しした山谷の他に、国際感染症の講義でハンセン病を取り上げ、もう生きている元患者さんが少なくなった静岡県御殿場市の神山復生病院を私立のハンセン病施設として、公立の施設として東京都東村山市の多磨全生園に引率し、隔離された患者さんの人生を学んでももらいました。目黒区にある日本で唯一の寄生虫館、お茶の水の順天堂大学の酒井シヅ先生の日本医学教育歴史館も見学しレポートを提出してもらいました。今平和な日本にもあった戦争下での生活を知るために、新宿の平和祈念展示資料館や九段下の戦傷病者のしょうけい館を見学してもらいました。

言行一致は、限られた世界の共通資源を大切にするため、教室の温度は推奨どおり夏は28度、冬は22度を守らせる様にしました。研究室では一人の時はエアコンをつけず、冬はできるだけ着込み、夏は窓とドアを開放し風を通しました。フィリピンでの看護実習に際しては、

貧しい現地でお世話になる宿舎でも水や電気、トイレトペーパーを使い過ぎないように自ら示し、日本から持ち込んだプラスチック包装は勿論、現地の買い物でついてきたプラスチックも全て日本に持ち帰る姿を見せました。

こういった姿勢が学生には、うるさいと思われていたと思いますが、4年生で国際看護コースをとった学生から卒業後助産コースに進む学生が散見される様になってきました。今の4年生のうち2人が、上智大学卒業生では

初めて札幌の某大学の助産コースに入学すると思います。

今年の3月に退職し、実家の北広島市に戻り、のどかさ、静かさ、安全にひたり、今現在も争いの中を逃げまどっている人々がいることが夢かと思います。私のバトンを手にする人は少ないと思いますが、受け取ってくれば、それがまた次の走者に受け継がれることを期待してお話を終えたいと思います。ご清聴本当にありがとうございました。

■記念講演会 第二部

『やれる理由こそが着想を生む。～はやぶさ式思考法』

川 口 淳一郎（かわぐち じゅんいちろう）国立研究開発法人 宇宙航空研究開発機構（JAXA）

宇宙科学研究所 宇宙飛行工学研究系 特任教授



100周年ということで本当におめでとうございます。こちらではないですけど、ある学校法人があって100周年記念というところで講演しましてね。中高大学と一貫校なわけですが、そうしたら講演が終わったとき中学生の生徒さんから質問があったんですね。

私は実は今年で64歳でして、私の職種はJAXAでは63歳が定年なんです。だから3月で定年退官したんですよ。私は特任教授というのはだからスペシャルという意味じゃなくて、おまけという意味なんですけど。生徒さんから質問があったんですよ。何て質問されたかという、先生は残りの人生を何をするんですかと聞かれまして、非常に辛辣な質問だなと思いました。

今日お話しする内容は必ずしもお医者さんのことに貢献できるかどうか分かりませんが、よくお話しさせていただく内容なので、ある意味では物の考え方というか、ちょっと偉そうかもしれませんが、そんなお話をお話しております。

私がここに来てはやぶさ2の話をしないわけにいけないので、お話しさせていただきます。はやぶさ2、私はメンバーなんですけど、そういう意味では第一線の活動は次の世代にもう託してあります。はやぶさ2、りゅうぐうという左側の下にあるような小惑星に到着しました。白っぽいと思うかもしれませんが、これは意図的に明るくしているんですね。本当は木炭ぐらい真っ黒な天体なんです。

右下にあるのが着陸をして、そして離陸するときに自分の影が表面に落ちた、その写真を送ってきているわけですね。表面には黒い粉が飛び散ったように見えます。これは弾丸を撃って試料を採るわけですね。はやぶさは

試料を採ろうとしたんですけど、実際には弾丸が撃てなかったんですね。2005年のことだったんです。これが13年越しというんでしょうか、14年目でこの宿題をやり遂げられたなというのが私にとっては非常に嬉しいところなんです。

はやぶさというのは実験機だったんです。本番の前に技術実証をして、それを確認するのが目的だった。だからこれはやり残していたということが私にとっては非常に引っ掛かっていたんですが、これがおかげさまで言ってみればそのやり方が正しいと証明できた、これが嬉しかったということなんです。

これは、「YouTube」なんかでパラパラ漫画が拾えますけれども、着陸して離陸する瞬間に写しているようなクローズアップの写真。実は不思議なことに表面から舞い上がってくるかけらは砂利のようなかけらじゃなくて、板きれみたいな薄っぺらいものが飛んでくるんですね。予想もしていないこととか、実際そうなんです。あれこれ考えたからって研究のテーマが決まるわけじゃなくて、こうやって出くわした不思議というものに本当に直面して初めて疑問がわくとか。だから研究者は喜んでるんですね。そうか、こんなことがあったのかということでしょうか。宿題を克服してきたことが何といても私にとっては嬉しいことだった。方法が正しかったことが証明できたということでしょうか。

中央左下に丸い物体が見えるんですが、これはインパクトクレーターといいます。衝突機なんですね。大きなクレーターを人工的に造るのが目的だったんです。発射をしてうまくクレーターができました。そのビフォア、アフターなんですけど。

どうして穴を掘らなきゃいけないのか、これが説明がなかなかされてないのかもしれませんが。小惑星というのは太陽風、太陽から飛んでくる陽子ですね。プロトン

の流れ、太陽風に吹きさらしになっているので表面が変質しているんですね。宇宙風化というんです。ですから全然風化していない無垢の材料を、試料を持ち帰りたいということで穴を掘ろうということですね。

そしてこの飛び道具を持っていきました。プラスチック爆弾ですね。爆薬を持って行って、秒速2キロメートル毎秒の速さでその銅の塊を表面に打ち込む。地上で実験すると直径が2メートルぐらいのクレーターしかできないんですが、この小惑星にぶつくと直系が10メートル以上の大きなクレーターができた。5倍というんじゃないですよ。もっと大きいです。体積は3乗ですから、とんでもなく大きな穴ができたということが非常に驚きだったんですね。

ここからいろいろ得られる情報もあります。つまり小惑星の表面って意外に脆いということでしょうかね。地球に向かって実は小惑星、隕石も含めてですけど、それが飛んでくるんですね。100年に1遍、20メートルぐらいの天体がぶつかってきます。そして1億年に1遍ぐらいは直径が10キロメートルの天体がやってくる。恐竜を絶滅させたような天体というのは直径が10キロメートルという天体。それで生命の9割が途絶えたというか、死に絶えたといわれています。そういう20メートルぐらいの天体だと今の技術だと実は早めに発見して、そしてロケットを打ち上げると軌道をわずかに変えてそらすことができるんですね。

じゃあ、どのぐらい表面が硬いのか。それが分からないとその手段って有効かどうか分からないわけですね。こうやって小惑星の表面に金属のもりを打ち込むことで表面の特性が分かったというのも非常に大きなポイントであります。

実はインパクト、飛び道具ですけど、非常に大きなリスクがあるんです。もちろん爆薬ですから、それをロケットに乗せて打つこと自体も大きな挑戦ですけどね。先ほどの切り離されたように見えた物体というのは実は母船とはケーブルでつながっているんですね。信号とかプログラムを書き込んで、電線を切ってそして放すわけですけど。電線を切るというのは簡単そうで実は簡単なことじゃない。例えばケーブルの被覆の1枚がほんのわずか残ってしまうとどうなるかという、その場で爆発してしまっただけで探査機は全部死んでしまいますよね。だからすごいですよ。切った後で被覆が残っていてもそれを引きちぎるというような機構も入れて、そうやって実は切り離しているんです。

でも大きな不安がありました。担当者は本当にびくびくしていたんですね。しかしおかげさまでこれがきちんと切り離されまして、これが大きなクレーターが造られた。大変嬉しかったわけです。そして周囲に飛び散ったその材料をこの間2回目に着陸で試料を採取することがたぶんできたらと思うんですね、それを地球に持つ

て帰ることで今までの分からなかった手つかずの試料が解析できるということになります。

我々だけが考えたその方法なんです。NASAが火星の上にキュリオシティという原子力で動く車を動かして、そしてそのキュリオシティはドリルで石に穴を空けてサンプルを分析する。素晴らしいことなんですけど、ここで行った我々の方法というのはもっとど派手な方法ですよ。言ってみれば非破壊検査から破壊検査に変わるというか。ですから将来人間が直接到達して活動するような月面でもそうかもしれませんが、この大きな飛び道具を持って、今まではとても考えられなかったような方法で探査を行えるようになるだろう、そういうふうに期待されているわけなんです。大変嬉しかったわけですね。

はやぶさ、はやぶさ2につながる話は1970年代、80年代、その話に戻っていきます。私たちは悩んでいたということでしょうか。今年は実はアポロ月着陸50周年ですね。1969年、アポロ11号が月面に着陸しました。ニール・アームストロングが月面に一步を記した。その翌年の2月、日本最初の人工衛星おおすみ打ち上げられます。我々の先輩方が、私たちの研究所がこのおおすみという最初の人工衛星を打ち上げました。

アポロの打ち上げロケット、サターン5型ロケットというのは高さ100メートルあるんですよ。重さ2000トンというんですね。ビルというか、貨物船1隻が打ち上がっていくようなもの。我々が打ち上げたおおすみというロケットは電信柱みたいなもので、打ち上げた衛星はせいぜい10キロぐらいの衛星でありまして、とんでもない差があるんですね。しかも人類が、アメリカの宇宙飛行士が月面を歩いた後でようやく打ち上がったということで。だからとてつもない差があって、とてもとても、我々は宇宙開発なんか携わっていると言えるかどうかということだった。

1970年代は1年に一度こういう小さな人工衛星を打ち上げては成功を喜んで、お祭り騒ぎをしていたという時代が続いたんです。我々はいったい何をするべきなのだろうか、自問していたわけですね。このままアメリカ、ソ連の後を追ってそしてやがては月に行くかもしれない、金星、火星と、そして米ソの宇宙開発をそのままトレースして歩くのだろうか、これが我々が抱いていた一番大きな疑問なんです。我々はコピーをつくることが求められているのだろうかということですね。

しかしその歩みは、その方向は実はきっとリスクが小さい、批判を浴びない選択ですよ。だって同じ人類がやっていることだもん。米ソという巨大大国がやっていること、その後を追っていくのはとても確実で、しかもやらなければいけない方法で、後ろ指を指されない方法ではないか、きっとそう思っていたに違いないんです。

1981年、スペースシャトルが最初に打ち上げられます。1970年代の後半はもうスペースシャトルの打ち上げが

秒読み、足音が聞こえてくるわけですね。スペースシャトルが打ち上がると世界中から使い捨てロケットが消えてしまうといわれる時代だった。我々の宇宙開発はどうなるのだろうか、それが私たちが自問していた大きなクエスチョンだったんです。

折しも1986年、ハレー彗星が地球に接近してくるんですね。ハレー彗星は周期が76年です。ですから普通の人は人生に1回しか見ることができないというものです。そのハレー彗星がやってきて、その1年に1遍小さな人工衛星を打ち上げていた私たちの先輩方は思い切った行動に出るんですね。

その私たちの先輩方は変人ばかり。すごい変人ばかり。どう変人かという、この人はどう考えても自信過剰じゃないかというような人の塊だったんですね。ですからその集団は何と国際共同でハレー彗星を探索しようという行動に出るんです。そしてヨーロッパとソ連と、そしてアメリカも含めて諸外国と一緒に国際共同に乗りだす。ハレー彗星に向けて探査機を造って打ち上げようということですね。だってそれまで1年に1遍そういうことをしていただけですよ。でもこれを成し遂げていくんです。

山は高い方がいいのか、そして惑星は大きい方がいいのだろうか、これが次にきた我々の疑問だったんですね。ケネディのアポロ計画に臨む有名な演説。ケネディはいろいろなことを言った。冷戦のさなかですから、相手より勝たなければいけないと、こういうことを露骨に言うわけですけど。それと同時に、ケネディは演説がうまいのですと流してしまいますけど。どうして月に行くんだ、山は高い方がいいだろう、こういうふうな文章が出てくるんですよ。だからケネディも要するに月は大きいから行くんだみたいなことを考えていたと思うんですけれども。

実は我々は違う結論にたどり着いたわけですね。山に行くと岩があります。そして地面に穴を掘ると、どんどん掘っても岩が出てくるのか。実は答えは違うんですよ。山にある石はガラスです。炭化ケイ素なんですね。角砂糖1個ぐらいで重さが3グラムぐらいでしょうか。しかし地球全体の比重は5から6あるんです。つまりそういう石でできているわけじゃないということですね。

実はどこにあるかという、重いものは全部地中に沈み込んでしまっているわけですね。だから地球をつくった材料は実は分かっているんです。大きい天体は形が丸くなります。直系がだいたい1000キロを超えるとほとんどまん丸と言っていいぐらい丸くなるんですね。ですから丸い天体は大きい天体で、大きい天体というのは思いものが全部下へ沈み込んでしまっている。だからいくら大きい天体に行ったからといって、昔この惑星がつくられた材料を知ることにはできないわけですよ。だから我々がたどり着いた結論は、試料を持ち帰って、そし

て小天体こそが太古の太陽系をつくったペールをはがす目標なんだというふうに結論したわけですね。

小天体は形が小さいので重いものも軽いものも分け隔てなく表面にあるんですね。だから表面の試料を持って帰さえすれば、かつて地球や惑星をつくった材料を手にすることができる。そして試料を持ち帰ることですね。持ち帰ってくると今は存在しない未来の技術でまた分析し直すことができるし、そして小さな分析装置じゃなくて兵庫県のSPRING-8のような巨大な設備を使って精密な分析もできるわけですね。探査機が分析装置を運んでいけるかもしれませんが、運べる量は非常にわずか。そして分解能も、要するに精度も悪い計測器しか積めないわけですよ。我々がたどり着いた結論は実は全然違っていった。当時小惑星に行こうと考えていた国はなかった。我々だけがこのゴールにたどり着いたと、こういうわけなんです。

その1985年、私たちがハレー彗星に向けて2つの探査機を打ち上げた年に小惑星サンプルリターン小研究会が開かれました。この場面、はやぶさにちなんで作られた最初の映画、竹内結子が出てくる映画ですけれども。その映画では最初の研究会の場面が最初のシーンとなって登場してくる。大変うれしいことですね。そして翌年の1986年、我々はもう飛行計画を考えていました。アンテロスという小惑星に向けて往復の飛行計画を考えていたんです。そしてプロジェクトを提案しようとしたんですが、提案が通ることはなかったんです。

それはなぜかという、高性能のエンジンがいるからですね。イオンエンジンがいるからなんです。大坂の環状線や東京の山手線。東京駅を出発し、そして山手線1周を乗って、そして線路沿いにある、例えばリンゴの木があるかどうか分かりませんが、リンゴの木から手を伸ばしてリンゴをもぎ取ってくれば確かに試料を持って帰れる、リンゴを持って帰れる。そしてそれは途中下車する必要がない方法なんです。しかし1遍途中下車をして試料を持ち帰ろうとすると。例えば新宿で降りて、新宿で途中下車してもう1回電車に乗って戻ってこなきゃいけない。そうすると減速してもう1回加速しなきゃいけないですね。そうすると膨大な燃料が必要です。ですから普通のロケットエンジンで造ると大部分が燃料という探査機になってしまうんですね。だから何も積めなくなってしまう。

私たちはイオンエンジンを造る必要があった。イオンエンジンは燃費が非常にいいエンジンなので、これを使うことでいろいろな飛び道具を持っていけるわけなんです。イオンエンジンの研究を10年間重ねてプロジェクトが走り出したのは1996年のことです。そして試料を持ち帰ったのが2010年ですから、30年近い時間がかかっているという。新しいことをしようと思ったら時間がかかるのはやむを得ないということでありましょう。

2016年の9月、NASA、アメリカ航空宇宙局はOSIRIS-REx（オシリスレックス）という探査機を打ち上げたんですね。何のミッションか。それは小惑星サンプルリターンのミッションだった。打ち上げられたのは2016年、はやぶさから実に13年遅れ。そしてはやぶさ2が打ち上げられてからさらに2年後にこの探査機が打ち上げられた。NASAもようやく気が付いたといひましようか。そうだ、やるべきことは小天体からのサンプルリターンでなければいけない。その意義に気付いてこの探査機を打ち上げたわけなんですね。

オシリスレックス、実はイオンエンジンを積んでないんです。どうなるかという、つまり大部分が燃料ということですね。だから持っていけるのは、ずうたいは非常に大きいんですよ。はやぶさやはやぶさ2よりずっと大きい探査機なんですけど、持っていけるものはサンプルを採取する装置しか持っていけないんですね。はやぶさ2はご存じのようにMASCOTという着陸機、それからMINERVAという着陸機、そしてさっきのインパクターを切り離すやつですね。いろいろな飛び道具やいろいろな手段を全部持っていける。なぜ持っていけるかというと、小型であってもイオンエンジンを積んでいるからなんですね。

ようやく探査の意義に気付いたのか。NASAには申し訳ないけれども情けなくてね（笑）。「ついに探査の意義を知りすれどもすでに時遅し」と皮肉って。もちろん意味はこの意味です、NASAさんよ、情けないじゃないかと。傍線を引っ張ってあったところに苦労の後があるんですよ。「を知りすれ（オシリスレ）」というのは一番上を見ていただくと分かるんですけど、探査機の名前でありまして。この名前を五七五七七の中に入れるということに苦労しましてね。

NASAはこう言うんですね。はやぶさは世界で2番目にほかの惑星から帰った。でも1番はNASAだよ。おめでとう、はやぶさは世界で2番目にほかの星から試料を帰還させた。1番はNASAだと口もはばかりずんなんです。もちろん着陸して試料を帰したのははやぶさこそが世界初の飛行だった。アメリカは国民をがっかりさせない。国民の皆さん、あの国は大丈夫、あれは2番目の国だ、この国が1番だからこの国の国民でいることに自信と誇りを持ってと言っているんですね。日本ではどうして2番じゃだめですかと政治家が言いますからね。はやぶさが目指したのは世界1じゃない、世界初を目指す。オンリーワンであることは自動的にナンバーワンだからです。世界初を目指したわけなんです。

はやぶさ、どうして前人未踏の着想が生まれてそして実現できたのか、外国からよく聞かれるんです。それは糸川英夫、日本のロケットの父といわれるんですが私たちの研究所の創始者の1人。そこから生まれた研究所の文化の血だ。自信にみなぎった変人たちの集団は非常に

簡単なことを言っている。こうしたからこうなるはずだ、こうすればこうできるはずだということに自信を持っている。

高いホールの天井にイスを積み重ねて踏み台を作る。そしてその天井に手を伸ばして何かを掴み取ろうとする。イスの足は何本あったらいいのか。最低限は3本ですよね。日本人は4本目の足、5本目の足を付けろという。そして6本目の足という人が出てくる。6本目の足が付かないとそのイスは不完全で不十分だ、やらない方がいいんじゃないか、やっちゃいけないというふうにどんどん後退していくんです。

私たちの研究所の文化の血は簡単。イスの足は3本あればいいという文化なんですね。自信が持てる3本足のイスは何段でも重ねる、どんな高いところにも手が届く。自信さえ持てれば、我々には海外に模範や手本が存在する必要はなかったわけですね。すべては心から始まる、そう思うんですね。

最後のスライドですね。「無から有を生ませる」と書きました。はやぶさ2はうまくいっているじゃないか。じゃあ、はやぶさ2っていったい何の貢献があったんですか。それは実は無から有を生ませるということ。どこにもプロジェクトを立ち上げるレシピがあったわけではないし、マニュアルがあったわけじゃない。さあ、ここでNASAに行け、そういうタイミングがどこから指示されるわけでもないですよ。自分たちがそれを行動しなければならぬことだ。しかしこの経験を次の世代に伝えていくのは難しいです。ここでNASAに行けよ。アドバイスした瞬間にそれは、だって自分たちで勝ち取らないものになってしまうじゃないですか。その部分というのがなかなか伝えられない。それを生ませるためには環境を用意しなくてはいけないと思いますね。どんどんそういうふうに行ってみれば、勝手にNASAに出掛けても駆け引きして何か成果を持ち帰ってくるようなことが許されるような環境を提供しなければいけない、そう思うわけなんです。伝授することでは伝わらないし、またそれを伝えることでは身に付かないと思うんでしょうか。無から有を生ませるような実体験をさせられたらなと思っています。

いつもこの言葉で講演を終わるんですけども。やれる意義を見つけて挑戦しない限り成果は得られないという。やったことがなくても自信を持つ、それは自分だけが切り替えられることなんですね。自信を持って、そしていろいろ駆け引きして自分で切り開いていかなければ成果は生まれないと思うんですね。今日聴かれている人はちょっと手遅れだったかもしれませんが、若い人に、ぜひ学生さんにはこんな言葉を伝えていただければと思うわけですね。以上で講演を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

記念祝賀会 特別講演『大志BBAに培われて開基100周年』

田 邊 達 三 (たなべ たつぞう) 北海道大学名誉教授 (北大医学部30期)



ただ今、過分のご紹介を頂戴いたしました田邊です。本日はご覧のようにBBA (Boys be ambitious) のお話をいたしますが、この100年という記念すべき祝賀会で、私が90歳になって出席できたこと、しかも、このような講演の機会を

与えていただき大変光栄に存じます。宴もたけなわで真打ちの登場です。30分で終わりますので、どうぞご清聴のほどお願いいたします。

私は18歳で北海道帝国大学予科に入学して、63歳で定年退職して北大を追い出されるまでの45年間、私は90歳ですのでその半分以上を北海道大学で過ごしました。おまけに私の家は北大に近かったので、小学校時代は中央ローンで冬はスキー、夏はあの小川で魚釣りをやって。大学を辞めてからは名誉教授という形で大学の中をうろうろしておりましたので、私にとって生涯北海道大学は忘れることのない、本当にいろいろな意味でお世話になった心のハイマートです。そんなことで今日のお話は、特に私にご指導をいただいた、教えていただき導いていただいた先輩の功績を中心にお話をしたいと思っております。

大志の伝統を築いたたくさんの先人の足跡をご紹介します。「Boys be ambitious (BBA)」なんて訳して大変失礼かもしれませんが、パイオニアとしてクラーク先生が築いた「大志を抱け」ですが、先生は1876年に北海道においでになって、8か月間の間にいろいろな業績を上げられたわけです。

有名な言葉を残されております。「Lofty ambition」、「Boys be ambitious」とともに「Be gentleman」です。このクラーク先生の伝記は、ここに掲げてあるマキ先生の伝記がよくクラーク先生のお話を詳しく調べてあります。(写真1) マキ先生はハーバード大学の出身でマサ

チューセッツ州立大学の教授をされておられますが、先生は二世ということで日本語も英語も得意ということで多くの資料を集め、マサチューセッツ大学はもちろん、北海道大学にもおいでになって、いろいろな資料を学長と共に調べ上げて書かれたこの論文は、クラーク先生の業績を明確に表しているのです。(写真2)

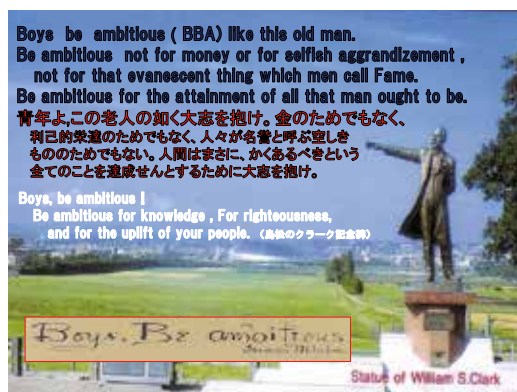


写真2

私は1964年から2年間、ボストンに行っておりましたが、マサチューセッツ農科大学、アマーストというところがあり、これはマサチューセッツの西側の外れで、ボストンから車で2時間ちょっとかかる田園地区ですが、そこでクラーク先生が初代の学長を務められたのです。

面白いことにクラーク先生が唱えた「Lofty ambition」は、ここの大学では「The highest style of man」、北海道大学の全人教育に相通じることを教える大学でした。私はここの正門に立ってキャンパスを眺めたときにびっくりいたしました。一面の芝生と小川は北海道大学の正門から眺めた、あの中央ローンに非常に似ているのです。(写真3)

学生会館にも、おそらく北大の卒業生が贈ったのだらうと思いますが、熊の像が飾られていました。ここはや

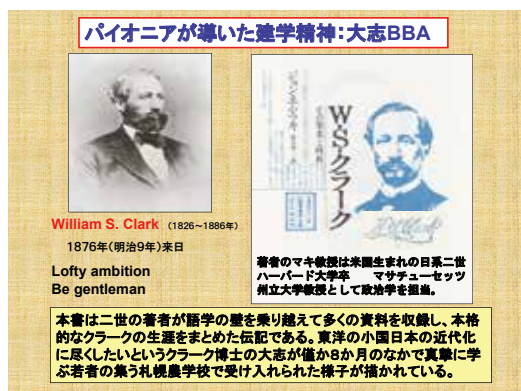


写真1

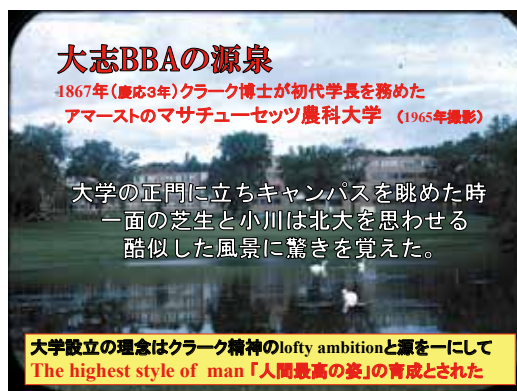


写真3

はりピューリタンの風土に満ちたニューイングランドの独特の風土で、そこで若い新島襄、同志社大学の先生です。それから内村鑑三先生がこの大学で学んでいました。明治の初期です。

面白いことにというか、やはり驚くことは、この地を選択して農業を勉強しようとしたのは、北海道開拓使の黒田清隆と米国の農務長官を務めたケブロンでした。ちょうど札幌と緯度も同じですし、気候も非常に似ております。そういうところでアメリカで始まった農業を札幌、北海道に導入したのです。

現在、私の孫がボストンに行っておりまして、最近のマサチューセッツ大学アマースト校の様子を送ってくれました。中央ローンはご覧のようにかなりきれいになりましたし、同じくクラーク会館があって、ここで学生の会議、集会が行われていたのです。

しかもこの大学は6つのカレッジを合体させてできた州立大学で、かなり評価の高い大学になっておりますが、コンピュータの学問、ナノテクノロジー、あるいは高分子学など最先端の医学、医学部はありませんが学問を教えるところで、学生数が2万3000人、すごいですね、留学生が1000人という誠に最先端のマサチューセッツ大学。源流のマサチューセッツ大学が頑張っている。これに負けないで北海道大学も頑張らなきゃならないということです。

もう1つ、ここまでクラーク精神を浸透させたのは言わずと知れた、ここに掲げておりますが、馬場先生が『大志の系譜』という立派な本をお出しになっております。先生は一高、東京大学、そして北海道大学応用電気研究所の教授、所長をされ、そして、北大の100年記念映画『大いなる楡』という映画をご覧になった方は多いと思いますが、それを作られたのです。

ここに3人が並んでおりますが、言わずと知れた新渡戸稲造、内村鑑三、宮部金吾の3先生です。この方々が札幌農学校から第一高校を経て、明治から昭和に至る日本の精神的基盤を築いた方です。

新渡戸稲造先生は有名な『武士道』ですね。(写真4)日本の精神状態を世界に示した名著ですが、先生は『武

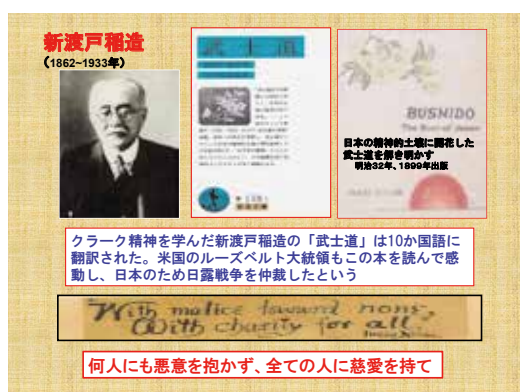


写真4

士道』によって日本を紹介したのみでなく、この本を読んだというルーズベルトが日露戦争の調停に一役買ったといわれております。

先生はここに掲げてありますが、「何人にも悪意を抱かず、すべての人に慈愛を持って」と説かれました。博愛、ヒューマニズムですね。素晴らしい方で銅像が北大のポプラ並木のところにあります。ご覧になった方も多いでしょうが、先生は第一高校を受験するときに試験官に向かって、私は太平洋の懸け橋になりたいと、「I wish to be a bridge across the Pacific Ocean」という素晴らしいアイデアを述べて、試験官を驚かせたといわれています。

先生は「東西の文化を融合することで、異思想の文化が完成される」というお話をされています。素晴らしいグローバルマインド、フロンティア精神です。(新渡戸先生の銅像は) ちょっと奥まっていますが、ぜひご覧になってください。

先生は英語が得意でした。成績は内村鑑三先生がほとんどトップだったそうですが、英語だけは新渡戸先生がトップだったといわれています。学生時代にご覧のようなノートをたくさん残されており、北大の博物館、あるいは植物園に飾られています。英語が得意だったのだなということを教えられます。

こんなことで明治に入る前に江戸時代に西洋医学が入ってきて、その近代化に貢献した方々が、ここに掲げておりますように杉田玄白、華岡青洲、緒方洪庵、前野良沢、大槻玄沢などで、たくさんの方がこの青梅の医学文化館に飾られています。(写真5) こういった方が西洋医学を導入することを非常に熱心に進められたために、我が国の医学は急速に近代化されたわけです。



写真5

それまでは漢方一筋、漢方ですからメスを使うなんていうのはとんでもないという医学でしたが、西洋医学が入ってやっぱり蘭学を導入しようとした方々をここに並べてありますが、杉田玄白、前野良沢によって『解体新書』が発行され、あるいは『蘭学事始』が出版されているのです。近代医学の扉を開いた杉田玄白の先駆的活動は『解体新書』で表していますが、彼の晩年の著書には、

蘭学の導入は今こそそのときだということ、そして、心を一致して導入に努めようということが記されています。いわゆる革新をあおった形の先駆性です。(写真6)

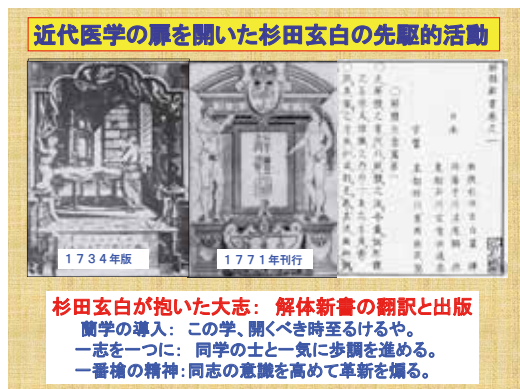


写真6

この先駆者に医聖とたたえられたのは華岡青洲先生です。自ら薬草を栽培し、母と奥さんを犠牲にしながらもトリカブトとチョウセンアサガオを配合した通仙散という麻酔薬を作って、全身麻酔の下で乳がんの手術をしているのです。1804年です。実にアメリカ、ハーバード大学のモートンがエーテルを使って、全身を吸入麻酔ですがエーテル麻酔をやった40年も前に華岡青洲先生が、こんな偉業を達成しているのです。

おまけに彼は独特の医の倫理観を持っていました。本当に寂れた田舎であるけれども、そこで自分が考えていることは、ひたすら病を治す起死回生の術であるということを一生涯懸命研究されております。和歌山の田舎ですが全国から患者がたくさん集まって、それを次々に治療しようとなさった素晴らしい研究家です。自然に恵まれた閑静の地で実験を重ね、医学の近代化に尽くした画期的偉業を挙げていらっしゃるのです。

一方、明治から大正・昭和へと、我が大志を抱け、「Boys be ambitious」の精神は伝えられましたが、北大医学部の開設と同時に医学会がスタートしております。大正12年です。(写真7) 私の父親は札幌市立病院の内科にありまして、この中に並んで写っていますので、私に



写真7

としては非常に懐かしい素晴らしい写真です。

私が習った医学部の教授の方々は、これは昭和10年ですが半数の方が昭和24～25年にまだおいでになって、私どもに医学を教えてくださいました。懐かしい先生方の顔を拝借して本当に思いは尽きません。

もう古い医学部から最近の医学まで全部私は見ておりまして、その中で暮らしておりました。(写真8) 皆さん方は写真で見るだけです。私の北海道帝国大学予科と言いましたが、これは新制の大学院、大学ができる前で北大予科が最後の期でした。桜星68期です。



写真8

そこで習ったことは誠に独特でして、英語の教育はシュバイツァーの自叙伝をみんなで輪読するのですが、シュバイツァーの業績は、もう皆様方がよくご承知の通りです。素晴らしい方ですね。神学と医学を習い、哲学を習ってオルガンを習う。自分で進んで南アフリカに行く。先ほどの井上先生のお話で、同じような素晴らしい活動をされており、これを英語で習うんですよ。「out of my life and thought」、医学を勉強しながら、嫌でもこの博愛精神、医の心を習うことのできる英語の時間でした。

同じようにドイツ語もそうです。ヘルマン・ヘッカー先生です。(写真9) ヘッカー先生はギターやらラジオを持ってきて、天気の良い日は中央ローンの芝生にみんなで円陣を組んでドイツ語の歌を習うんです。有名な



写真9

「Ich weiss nicht」、「なじかは知らねど心わびて」と、あの『ローレライ』を一生懸命、いろいろな歌をドイツ語で習いました。おのずとドイツ語に親しみ、ドイツ語をやるという気にさせられました。

ヘルマン・ヘッカー先生は非常に優しい方で、お孫さんを乳母車に乗せて、よく北大の構内を散歩されていたのを思い出します。民謡を通じてドイツ語に親しみ、ドイツのロマンチズムを学ぶことができたのです。

学生時代に特に印象深い講義は、遺伝子学の講義での明峯先生のお話です。特に木原均先生のゲノム分析の講義は独特でした。(写真10) 宮部金吾先生の下で小麦の研究を始め、その延長線として京都大学、あるいはカイザー・ヴィルヘルム研究所で勉強をなさって、ゲノム分析の権威となりました。面白いお話は種なしスイカはどうやって作るかという講義でした。誠に興味津々で今でも思い出すことができます。



写真10

もうお一方は理学部の牧野佐二郎先生です。理学部の小熊捍先生の下で染色体の勉強をなさり、染色体の権威になり、私の同級生も先生の下で学位論文を作った方がいます。誠に素晴らしい先輩の話を聞いて感銘したのを覚えています。

北大の予科は昭和25年に閉鎖され、この連中が30周年、40周年と、みんな集まって当時話題の牧野先生、木原先生のお話を再度聞くようにしました。(写真11)

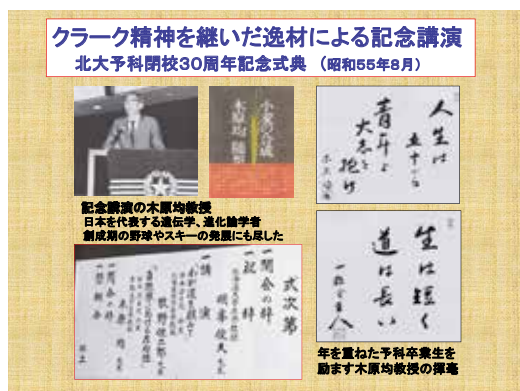


写真11

木原先生は独特の先生で学生時代、野球部のキャプテン、冬はスキー部のキャプテン。運動はもちろん達者で、ちょうど30年たって私どもが50歳前後になったころ、慰めるためでしょうが、人生は50歳からだとして私どもを励ましてくださいました。「生（いのち）は短く道は長い」というのは、これはよく言われることですが、木原先生、牧野先生のお話は感銘深いものでした。この年になっても忘れることができません、脳裏の壁にへばりついていきます。

そんなことで桜星68期生が北海道の正門に「大志を抱いて」という像を作りました。非常に元気はつらつの連中が集まって、老いてもたゆまぬ北大予科修了生の心「大志を抱いて」を表現していました。いい年をして何を言っているのかということはおっしゃらないでください。こういうインパクトが私どもの人生を大きく左右しているのです。

大学に入って忘れることができないのは、やはりこの山際、市川の人工がんの研究です。(写真12) フィルヒョウに学んだ山際先生は助手の市川先生に命じて、ウサギの耳にコルターを塗って人工がんを作ることを進めました。市川先生は恩師に言われたとおり、懲りもせず31匹のウサギの耳にタールを塗り、ご覧のような立派ながんができたのです。



写真12

山際先生は、がんの研究を続け『胃癌発生論』を出して胃がんの権威になりましたし、市川先生は北大の農学部教授になられました。やっぱり独特な格言を残しておられます。残念なことに、この素晴らしい研究は誤って別の方にノーベル賞がいったために、ノーベル賞は受賞できませんでしたが、山際先生は「癌出来つ意気昂然と二歩三歩、行きつけばまた新しき里のみえ」。市川先生は「世捨人三五の糧に活くとも鏡下に見ゆるは錦繡」という素晴らしい格言を残しておられます。研究者がいかに苦勞をして実る穂、成果を上げるかを如実に示すありがたい言葉だと思えます。

もう1つ学部でよく話題になったのは木下良順先生と長野泰一先生です。(写真13) 初代の病理学教授にな

られた木下先生はバターイエローによるラット肝がんの研究で大阪市立大学の教授になられ、あるいはアメリカにシティー・オブ・ホープという研究所を作られています。



写真13

先ほどご紹介されていた田中先生は第5代の病理学で、木下先生の使っておられた柄で、今自分が勉強しているとおっしゃっていました。やはり素晴らしい歴史を感じさせますよね。

長野先生は7期生です。北大からパスツール研究所に行かれてウイルスを研究なさって、インターフェロンの発見で世界的な業績を上げられた方です。講義でしばしば木下先生、長野先生の話が出て、学生に大きいインパクトを与えたこと思い出します。後進に大志の心を伝える快挙という言い方ができるかと思います。

(写真14) 医学部時代は、やはりいろいろな教授のお話を一人一人挙げるべきかもしれません。例えば生理学の篠島教授は、あの当時すでに老化の話なさったり、50年前ですよ、また人工血液を作るなんていうとてつもないアイデアをお話しになったり、生化学の安田教授は、これからは核酸の時代だよと言われたのが思い出されます。これらが後に遺伝子の研究に繋がっていきました。

真崎先生はジギタリス、山田守英先生はウイルス学、そして病理学では武田病理、安保病理。2人とも、がん

のことで一生懸命がんを退治するお話をなされました。基礎教室は、こうして次々にナンバー講座が出来上がっていきましたが、臨床面ではドイツ医学からアメリカ医学へ、そして抗生物質による感染症の徹底した制御へと移っていきます。

私の入局した当時は病室の半分は結核患者でした。それが結核患者からがん患者に移行していっております。いろいろな専門各科が増設されています。ここにちょっと挙げてありますが、ナンバー内科が次々にできていったのを思い出します。

特に名前をお挙げすると、ミノコウの生理学、篠島高先生の先ほど申し上げた老化とか人工血液のお話。そして先生は超音波研究所をつくられ、これが今もうなくなりましたが応用電気研究所になって、たくさんの方がここで研究をしました。

やっぱりもう1人独特の講義をなされたのはタケカツ先生です。武田勝男先生は武田肉腫をはじめ、がんについて面白く興味を持たせるようなお話を次々になさり、がんの研究所を作られ、今日もおいで小林先生がこの研究所を充実させたのです。

中村ポッケン先生はウイルスですが、ちょうど私のときに山田先生が新任の教授になられて、ウイルス学を一生懸命教えられていたのを覚えています。内科学では山田先生が結核、中川先生ががん、そして外科学では三上先生がエヒノコックスを見つけて、エヒノコックスの治療として肝臓の手術に進展させ、また奥田先生は低体温、低温の研究から低温科学研究所を作られているのです。このように自らの研究、経験をとおして科学の心を教えられたのです。

教授たる者、やはり世界に冠たる研究をやるミッションがあります。ミッションはこのメディカル・ライブラリー・シリーズで表しています。たくさん教授が英文で発表されています。残念ながらこれをもっと広く配布できるような形にしたら、もっと広がるのではないかなと思いますが、図書館でほとんどの本が眠っているような感じがいたしました。

私も負けずとして動脈瘤の話をしていただきました。「Ivalon Sponge 閉鎖法」を開発したのを思い出します。私が辞めるころ、1989年には大学院設置基準の改正、1991年には大学設置基準の大綱化など学部改組が進んでおりました。ここに挙げた教授会は1992年の教授会で、一致してこの問題に取り組んだのを思い出します。

時代の変遷に対応した学部長、病院長としての仕事も私は結構一生懸命やったつもりであります。(写真15) 廣重先生がうたった生命医科学総合研究科構想、これこそが21世紀に向かって最も進めるべき大きな課題でした。

あとは医学教育カリキュラムとか合同連携カリキュラム、あるいは視聴覚学習施設、そんなものをするこ



写真14

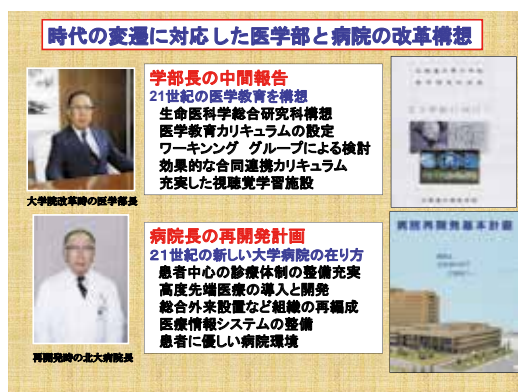


写真15

本にしております。『21世紀に向けて』という本で、もう1つは病院長として当然、患者中心の医療、先端医療機器の導入、そして医療情報システムの整備、患者に優しい病院環境といったことで、『病院再開発基本計画』を本にまとめてあります。

そんなことで私の後を継いだ方々が、医学の改革を目指す現在の大学院を構想しております。（写真16）今、示しておりますのは現在の大学院に至る初期の構想です。北海道大学病院、これも私は小さいときから全部知っている。（写真17）知っている方はだいぶ少なくなってきましたが、やはり思い出の多い場所でいろいろな苦勞をしたのをいつまでも思い出せます。

そんなことで私が病院長のころに病棟建築が始まりま



写真16



写真17

した。病棟建築の式典があつて、これは伴学長、廣重学部長、そして私が並んでおりますが、今の病院が出来上がる初期の構想です。

北大病院は平成9年に創立75周年記念碑を出しております。私の思い出はビーナス像です。これは病院の建築のために病院長室に置かれていたビーナス像が、私はちょうど病院の協会の理事長を務めておりまして、そうだ、温室を造ろうということで温室を寄附した。その中にビーナス像を移そうということになって移して、現在は患者さんの憩いの場所となっております。

私は学術的にもいろいろなことをやりました。（写真18）90回日本外科学会の開催です。北海道で3度目の学会でしたし、衛星放送の遠隔手術放送など独特な発表もいたしました。ここで私がいつも考えていたのは、伝教大師最澄の「一隅を照らす」。私は外科学のほんの一端を勉強していましたが、自分の受け持った部分でしっかりと専門を磨いて推進するということが大事だということで、私は「一隅を照らす」という言葉が大変好きで、よく用いました。



写真18

同じことが第100回北海道外科学会の記念講演を光栄なことにいたしました。ここでは福沢諭吉先生の『学問のすすめ』の中で未来のための今、「Act now for the future」ですね。これは私どもが肝に銘じて今を生きていくことが非常に大事だということを教えられます。

（写真19）最終講義はご覧のように学生に囲まれて、名残惜しそうにみんな送ってくれましたけれども、私はここで「創意と熱意で大志を抱き明日の生命科学を拓け」と教えました。私は医の心という額を書いていただいてフラテ会館に掲示しております。今の学生さんが折に触れて、今、自分がやらなければならない医の心を習得していただきたいと思っております。

私は同窓会会長もいたしました。同窓会新聞第100号を、ご覧のように平成10年のことでしたか、出しております。いろいろな編集長をやられた先生方のお話と、同門会長の記事が載っておりますが、この100回にわたる新聞の縮刷版を私が発行することができました。これ



写真19

は100号にわたって医学部の歴史を伝える非常に貴重な資料だと考えております。私の他に歴代の理事長のお名前も載せてありますが、こういった方々が一生懸命努力をなさって、我が医学部の発展のために尽くされてきたのです。

やっぱり、今、立派に出来上がったフラテ会館を思い出しますが、『フラテ』という名称は学友会誌創刊号で1925年に、戦争があって中断していますが、戦後、復刻記念号が1956年に出ています。このエンブレムをお持ちになっている方はいらっしゃると思います。私はおそらく学位をもらったときに頂戴したのではないかと思います。この貴重なエンブレムは今総長が立案したものであって、意味深長なことが書かれており、赤色の盾は女神アテナの盾、星は北斗七星と北極星、赤は動脈血、黒は静脈血、黄色は神経を表しています。

また同門会誌に児玉譲次教授が書かれていますが、イタリアを旅行して、このフラテのエンブレムを見て、一

般の人が、おお、フラテと言って先生を拝んだと言うんですね。フラテの意味が古くは兄弟でしたが、今は修道士という意味なのだということを見玉先生が書かれております。

もう一度繰り返しますが、現在の医療の基礎をつくられた医聖が説く珠玉の遺訓を思い出してください。「医事は自然に如かず」、「医は活物窮理、内外合一」、緒方洪庵の「医は人のため己のためにあらず」という、当然のことを私どもはしっかりと肝に銘じて日々の診療に当たるべきです。

最後になりましたが、やはりフラテを象徴しているのはエンレイソウです。祈念したい大志の継承：未来を拓くイノベーション。シンボルマークのエンレイソウのように真摯な創造活動を重ね、未来を展望する人材育成と環境整備によって、100年後もセンター・オブ・エクセレンスとして先端的学術の歩みを続けることを願っています。

本日、川口先生から誠にインパクトあるお話を頂戴しましたが、あのような素晴らしいインパクトを私どもはいつも受けていた方がいいと思います。人間は怠け者です。いつもインパクトを受けることが非常に大事だと思います。どうかこれからを担う皆さん方、英知を結集して100年後の学府の姿を作り上げていただきたいと思います。

100年を記念して、つたない講演をいたしました。皆様方にたくさんの先輩が築いた、この素晴らしい伝統をいっそう発展させていただきたいと願っております。ご清聴誠にありがとうございました。

第14回医学研究院連携研究センター研究成果発表会を開催

第14回医学研究院連携研究センター研究成果発表会が11月6日、医学部百年記念館1階大会議室で開催されました。

本センターは、長期的展望に基づいて堅実な知を追求する基盤的研究と、目標と期間を設定して先端的・革新的な研究開発を目指す戦略的研究の融合を図ることを目的として、平成18年4月1日に設置された学際的研究拠点です。これまで、大型研究プロジェクトを中心として多彩な研究活動が展開され、医学・生命科学と理工学の融合領域において、世界をリードする数多くの研究成果

が得られています。

今回の研究成果発表会には、56名の教職員・学生等が参加し、センターの各分野から最新の情報が提供されました。また、特別講演として、京都大学農学研究科 植田 充美（みつよし）教授 による「マルチオミクスの生かし方—ゲノム情報と動的生命現象との直結に向けて—」と題した講演を行われました。参加者にとって、今後の取り組みに向けた新たな可能性が示唆された研究成果発表会となりました。



講演する植田教授



発表会の様子

令和元年度医学教育等関係業務功労者表彰について

津 田 弓 子（つだ ゆみこ） 技術支援部 臨床検査技師



この度は医学教育等関係業務功労者として表彰を賜り、身に余る栄誉と深く感謝申し上げます。表彰にあたり、ご推薦、ご尽力いただきました関係各位の皆様にご心より厚くお礼申し上げます。

28年前に医学部内科学（第三）講座に採用された時は、臨床の現場で患者の命に向き合う医師の姿を目の当たりにし、出来るだけ要望に応えようと思いました。治験や保険点数のない特殊検査に関する業務、そしてたくさんの臨床サンプルの管理など。医局、病棟、外来、検査室を飛び回る毎日でした。しかし、自分のスキルが限られているため、思うようにいかないことも多くありました。そのような中、何度も先生や同僚に助けられ励まされたことは忘れられません。

次に医歯学総合研究棟中央研究部門に配属されまし

た。この部門は医学研究院と歯学研究院における共同研究施設で、一つの教室では維持するのが難しい実験機器を多数設置しています。それらの機器を管理運用するのが仕事ですが、機器が故障して研究者の実験が滞ることが一番つらいです。また、分析装置は日々、開発が進み新しくなっていますので、勉強が欠かせないのですが、未熟なため反省することも多いです。それでも担当の分析装置などを通じて、様々な教室の研究者の方とお話することは、刺激を受けますし、充実した時間となっています。

最後になりますが、自分がこれまで仕事を続けることが出来、この功労者表彰を受賞出来たのは、講座、部門の先生、職員の方々の温かいお力添えがあつてのものと、深く感謝申し上げます。これを励みに今後も業務の遂行に精進してまいります。ありがとうございました。

第23回（2019年度）医局対抗サッカー大会開催報告

福田 純 己（ふくだ じゅんき）消化器外科学教室Ⅱ 医員

本年度の医局対抗サッカー大会は11月23日に札幌サッカーアミューズメントパーク（SSAP 屋内グラウンド）を舞台に行われました。今年度は、消化器外科Ⅱ（心臓血管外科合同）、内科Ⅱ、腫瘍病理、循環器内科、リハビリテーション科、消化器外科Ⅰ、精神科、分子腫瘍、眼科、麻酔科、整形外科の11チームが参加しました。チーム数や会場の関係により本年度も、1発勝負のトーナメント形式の大会となりました。また、各チームにより多くの試合をして頂くために、敗者復活トーナメントも実施しました。

各チーム初戦から気合の入った試合運びとなっていました。内科Ⅱ vs 腫瘍病理戦では14-0の大量得点、精神科 vs 分子腫瘍戦はPK戦までもつれ込む接戦となりました。

準決勝第1試合、昨年度準優勝消化器外科Ⅰ vs 整形外科では、本年度は消化器外科Ⅰの参加人数が少なく不利な状況での試合となり、まさかの大量失点をつくられての0-14での敗戦となってしまいました。準決勝第2試合消化器外科Ⅱ vs 循環器内科では、前半に4点を先制した消化器外科Ⅱがそのまま優位に試合を運び、5-2で

の勝利となりました。

また残念ながら、初戦敗退となってしまったチーム同士の敗者復活トーナメントでは、眼科チームが優勝となりました。

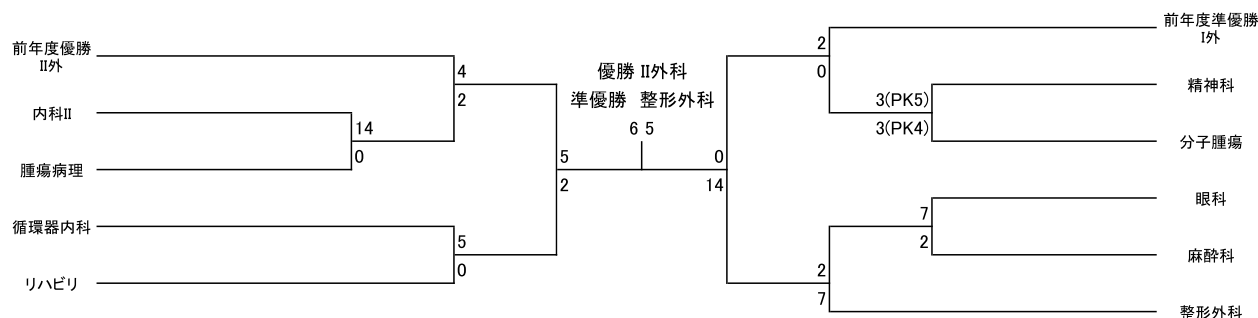
決勝は昨年度優勝の消化器外科Ⅱ vs 整形外科との試合になりました。消化器外科Ⅱは前半の早い段階にFW陣のシュートが決まり、そのまま勢いに乗り前半を5得点で折り返しました。後半からは整形外科の猛攻にも合い終了間際に間接フリーキックなどを含め立て続けに失点する場面もありましたが、DFを中心とした体を張った守備によりなんとか逃げ切り、最終的には6-5という僅差での勝利となりました。消化器外科Ⅱが2年連続優勝という結果になりました。

予選・決勝トーナメントを通じ、大きなけが人を出さずに大会を終えることができたのは何よりでした。来年度は、トーナメントだけではなくリーグ戦の開催もできたらと考えております。最後になりましたが、運営や審判業務を手伝ってくれた北大医学部サッカー部員の皆様に感謝し、この場を借りてお礼申し上げます。



優勝した消化器外科Ⅱチーム

2019年 医局対抗サッカートーナメント



3 お知らせ

北海道大学医学部創立 100 周年記念事業基金

北海道大学医学部創立 100 周年記念事業基金情報
基金累計額（令和元年 12 月 31 日現在） 1,113 件 505,265,030 円

令和元年 12 月末までのご寄附状況

法人等 160, 個人 953 名の方々から 474,432,447 円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、令和元年 10 月 1 日から令和元年 12 月 31 日までにご寄附をいただいた方、又はそれ以前にご寄附をいただき前記期間中に本基金に用途変更いただいた方のうち、同意をいただいているの方々のご芳名を以下のとおり掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

遺伝子病制御研究所	寺田医院
医療法人社団 康久会 中島産婦人科医院	テルモ株式会社
医療法人社団ほり内科クリニック	日本新薬株式会社 札幌支店
小野百合内科クリニック	ニューオータニイン札幌
株式会社須田電気工事	北大医学部 46 期
協和キリン株式会社	北海道大学医学部精神医学教室同門会
佐川昭リウマチクリニック	マルホ株式会社
サノフィ株式会社	

寄附者ご芳名（個人）

阿部 和厚	小谷 里美	古梶 正洋	田邊 達三	藤澤 裕子	武蔵 学
有賀 浩子	小野寺 康博	小林 仁・衣子	谷口 直之	藤本 泰幸	村上 正晃
池田 重雄	笠井 裕子	齋藤 健	寺澤 睦	古堅 祐行	山田 豊
大場 雄介	笠井 正晴	佐藤 拓道	遠山 晴一	堀田 彰一	渡邊 光明
大原 正範	神島 保	信太 知	長島 健一	牧野 憲一	東 市郎
近江 亮	菊池 雄三	瀬戸口 剛	長瀬 清	松浦 信夫	村上 正晃
大森 哲郎	北河 徳彦	竹野 巨一	髭 修平	松家 治道	
岡田 宏美	北野 明宣	田尻 稲雄	廣瀬 直人	三好 秀明	

医学研究院・医学院・医学部医学科 最終講義・退職記念式典のお知らせ

令和 2 年 3 月退職の教授の最終講義・退職記念式典を次のとおり開催します。

退職教授：清水 宏 教授（皮膚科学教室）

日 時：令和 2 年 5 月 26 日（火）15：30～

場 所：医学部学友会館「フラテ」ホール

新任教授特別セミナーについて

医学研究院では、平成24年度より、新任の教授が現状と抱負および研究内容等を講演するセミナーを開催しています。

第37回 木下 一郎 教授（がんゲノム医療学教室）
演題：「がんゲノム医療の臨床実装と課題」
令和2年1月23日（木）開催



木下一郎教授

消防訓練の実施

医学研究院・医学部，遺伝子病制御研究所，アイソトープ総合センター合同で11月7日（木）11時55分，医学研究院中研究棟1階給湯室から出火したとの想定で，消防訓練を実施しました。

出火時の初動体制を確立するために，自衛消防班が直ちに活動し，出火場所に対応して各職務分担の任務〈通報連絡・避難誘導・消火・防護措置・救護〉を行い，被害を最小限に食い止める訓練を実施しました。

終りには吉岡研究院長から，訓練を通し，火災時の避難や自衛消防の手順について理解を深めることの重要性や日頃の防火に対する心構えについて話があり，参加した教職員・学生は防災意識を改めて見直す機会となりました。

令和2（2020）年医学院（修士後期・博士後期）学生募集出願状況

令和2（2020）年度医学院修士課程後期募集及び博士課程後期募集の結果、出願者数は次の通りでした。

修士後期募集 10名（男 3名、女 7名）
博士後期募集 64名（男 45名、女 19名）

なお、修士課程及び博士課程の後期入学試験日程は、次のとおりです。

試験日 令和2（2020）年1月15日（水）
合格発表日 令和2（2020）年2月7日（金）

令和元年度 科学研究費助成事業採択状況

単位：千円

研究種目	新規申請	継続申請	交付内定（採択）	交付決定	
	件数	件数	件数	件数	交付金額
新学術領域研究（総括班）	0	0	0	0	0
新学術領域研究（国際活動支援班）	0	0	0	0	0
新学術領域研究（研究領域提案型・計画研究）	0	0	0	0	0
新学術領域研究（研究領域提案型・公募研究）	18	3	7	7	65,400
基盤研究（S）	1	0	0	0	0
基盤研究（A）	5	2	3	3	26,000
基盤研究（B）	17	16	22	20	84,600
基盤研究（B）（特設分野研究）	0	0	0	0	0
基盤研究（B）（海外学術調査）	0	0	0	0	0
基盤研究（C）	45	51	68	69	69,300
基盤研究（C）（特設分野研究）	2	0	0	0	0
挑戦的萌芽研究		0	0	0	0
※挑戦的研究（開拓）	1	2	2	2	8,800
※挑戦的研究（萌芽）	25	5	4	9	24,200
若手研究（A）		3	4	3	34,400
若手研究（B）		2	2	2	1,900
※若手研究	26	6	24	21	29,900
研究活動スタート支援	8	1	6	9	12,480
合 計	148	91	142	145	356,980

※挑戦的萌芽研究はH28年度で公募終了。H29年度からは制度変更により挑戦的研究（萌芽・開拓）となった。

※H30年度から若手研究（A）は基盤研究に統合し、若手研究（B）の名称が「若手研究」へ変更となった。

※交付内定（採択）数は応募時以降の医学研究院の研究者の転入出等を反映させていない。

※交付決定数は交付申請書提出時までの医学研究院の研究者の転入出及び辞退等を反映させた。

※採択率（新規・継続を含む） $142 \div 239 = 59\%$

※令和1年11月1日現在

平成31（令和元）年度 財団等の研究助成採択状況

財団法人等名	種 別	研究者名	交付金	備 考
コスメトロジー研究振興財団	研究助成	西江 渉	2,000,000	
寿原記念財団	研究助成	河野 通仁	1,500,000	
寿原記念財団	研究助成	今野 哲	1,500,000	
アクテリオンファーマシューティカルズジャパン株式会社	契約研究助成	真部 淳	1,500,000	

令和元年10月31日までの採択判明分



(撮影：小林 公恵)

編集後記

北海道大学医学部100周年記念号を皆様のお手元にお届けでき、大変うれしく思っております。昨年10月に多くのご来賓をお迎えし盛大に行われた北海道大学医学部百年記念館落成式及び北海道大学医学部創立100周年式典・講演会・祝賀会のご挨拶、ご講演を収録し、読み応えのある内容となっております。百年記念館は道産木材をふんだんに使用したデザインとなっており、雪景色に大変映えています。

100周年記念事業では学生・若手医師育成のための基金を設立すべく、引き続きご寄附を募集しています。これまでに9,993名の卒業生が“BBA”の精神を涵養し、本学を巣立ちました。令和になって初めての新年を迎えると同時に北海道大学医学部は101年目を迎え、更なる歴史を刻んで行きます。皆様の一層のご支援を賜りたく、この場を借りてお願いいたします。永久保存版ともいえる本号を存分にお楽しみいただけたならば幸いです。

広報編集委員 七戸 俊明

—— Home Pageのご案内 ——

医学研究院／医学院／医学部医学科広報は
<http://www.med.hokudai.ac.jp/general/ko-ho/ko-ho.html>
 でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受
 付けメールアドレスは、
goiken@med.hokudai.ac.jp
 となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究院／大学院医学院／医学部医学科

発 行 北海道大学大学院医学研究院・大学院医学院・
 医学部医学科 広報編集委員会
 〒060-8638 札幌市北区北15条西7丁目
 連絡先 医学系事務部総務課庶務担当
 電 話 011-706-5892
 編集委員 田中 伸哉（委員長）、篠原 信雄、
 清水 伸一、七戸 俊明、的場光太郎